

工 事 名 小川学童保育室新築工事

特記仕様書（構造関係）

I 建物概要

1. 主要用途 学童保育室

2. 工事場所 埼玉県比企郡小川町大字小川337番の一部

3. 棟名称及び構造・階数等

建築面積	508.03 m <sup>2</sup>
延べ面積	451.31 m <sup>2</sup>
床面積 1階	451.31 m <sup>2</sup>
階	m
階	m
階	m
階	m
建物高さ	7.43 m 軒高さ 5.3285 m
工事種別	○新築 ・増築 ・改築 ・移転
増築計画	・有り ○無し
構造種別	地上 木造 地下 造
架構型式	X方向 軸組・壁式 構造
	Y方向 軸組・壁式 構造
耐震構造方式	・耐震構造 ・免震構造 ・制振構造
耐震安全性の分類	・Ⅰ類(Ⅰ=1.50) ○Ⅱ類(Ⅰ=1.25) ・Ⅲ類(Ⅰ=1.00)

4. 構造計算条件

a 耐震設計条件

地震荷重	建物一次固有周期 ( ) 秒		
地盤種別	第 ( ) 種地盤		
地域係数	Z=		
計算ルート	X方向	※許容応力度計算 (ルート )	
	その他		
設計層間変形角	Y方向	※許容応力度計算 (ルート )	
	その他		
設計層間変形角	X方向	一次設計	
		二次設計	
	Y方向	一次設計	
		二次設計	

b 耐風設計条件

基準風速 (V0)	( 30 ) m/秒
地表面粗度区分	・Ⅰ ・Ⅱ ○Ⅲ ・Ⅳ

c 耐積雪設計条件

建設地の標高	( 90.9 ) m
多雪区域の指定	・有り ○無し
設計垂直積雪量	( 33 ) cm

5. 地盤調査資料

調査内容	○サウンディング (※標準貫入試験 )
	・土質試験 ・孔内水平載荷試験 ・平板載荷試験
調査位置	構造図 ( / 図 ) による
液状化対策の検討	・有り ・無し

II 建築工事仕様

(1) 質問回答書、本特記仕様書及び図面に記載されていない事項は、すべて「埼玉県建築工事特別共通仕様書」及び国土交通大臣官房官庁営繕部監修「公共建築工事標準仕様書（建築工事編）（令和4年版）」（以下、「標準仕様書」という。）による。

(2) 標準仕様書で「特記がなければ、」以下に具体的な材料・工法・検査方法を明示している場合において、それらが関係法令等（条例を含む）と異なる場合には、具体的な対応策について監督員と協議すること。

(3) 特記仕様書の表記

1) 項目は、番号に○印の付いたものを適用する。

2) 特記事項は、○印の付いたものを適用する。○印の付かない場合は、※印の付いたものを適用する。

3) 特記事項に記載の { . . . } 内の表示番号は、埼玉県建築工事特別共通仕様書の当該項目、当該図表を示す。

4) 特記事項に記載の ( . . . ) 内の表示番号は、標準仕様書の当該項目、当該図表を示す。

5) 製造所名は、五十音順とし、「株式会社」等の記載は省略する。また ( ) 内は製品名を示す。

6) ⊕は「特定調達物品等」を表す。

7) 注は標準仕様書記載事項で、注意すべきものを示す。

④	1 支持地盤等	・杭基礎 (4.2.1)(4.3.4、5)(4.5.5、6) 支持地盤の位置及び種類(基礎ぐいの先端の位置含む) ・図示による ( )
	2 既製コンクリート杭地業	・直接基礎 支持地盤の位置及び種類(基礎底部の位置含む) ・図示による ( ) 試験掘り(掘切り底の状態の確認等) ・行う(位置等) ・図示による ( ) 長期設計支持力 ( ) kN/m <sup>2</sup> ・地盤の載荷試験 ( ) 箇所 (4.2.4) 載荷試験の方法 ・地盤工学基準JGS 1521による 試験の位置、載荷荷重 ※図示による ( ) ・液状化対策 工法、施工範囲、仕様及び計測、試験等 ※図示
	3 鋼杭地業	種類 (4.3.3) ・遠心力高強度プレストレストコンクリート杭 (PHC杭) ・プレストレスト鉄筋コンクリート杭 (PRC杭) ・外殻鋼管付コンクリート杭 (SC杭) SC杭の鋼管材料 ・SKK400 ・SKK490 杭の種類、性能及び曲げ強度等による区分、寸法、継手の箇所数等 (4.2.2)(4.3.3)

④	4 場所打ちコンクリート杭地業	・機械式継手(継手部に接続金具を用いた方式のもの) 工法 ※評定等を受けた工法 検査 ※評定等により定められた項目 施工 ※評定等をされた施工管理基準による 杭頭の処理 (4.3.8)(4.4.6) ・処理する 処理方法(切断にともなう補強方法含む) ・図示による ( ) 杭頭の中詰め材料 (4.3.8) ・基礎のコンクリートと同調会のもの 工法 (4.5.1、4~6) ・アースドリル工法(安定液・使用する・使用しない) ・リバース工法 ・オールケーシング工法(孔内の水張り・行う・行わない) ・場所打ち鋼管コンクリート杭工法 鋼管巻き材料 ・SKK400 ・SKK490 鋼管径・板厚・長さ ※図示による ( ) 併用する工法 (4.2.2)(4.5.4) ・拡底杭工法(安定液・使用する・使用しない) 材料その他 (4.2.2)(4.5.4) 寸法等 試験杭本杭
	⑤ 砂利地業	材料 ・再生クラッシュラン ⊕切込砂利又は切込砕石 (4.6.2、3) 施工範囲 ○基礎下、基礎梁下、土間コンクリート下、土に接するスラブ下 厚さ ※60mm ○120
	⑥ 砂地業	材料 ・シルト (4.6.2、3) ・有機物等の混入しない締固めに適した山砂、川砂又は砕砂 施工範囲 ・図示による ( ) 厚さ ※60mm

④	⑤ 鉄筋の定着	鉄筋の定着長さ ・図示による ( ) (5.3.4) 機械式定着工法 運用箇所 ・図示による ( ) 種類 ・摩擦圧接接合 ・鋼合グラウト固定 ・嵌合グラウト固定 工法 ※第三者機関の評定等取得している工法とする 必要定着長さ ※評定等の評価内容による 補強筋形状 ※評定等の評価内容による かぶり厚さ ※評定等の評価内容による 品質確認 ※評定等の評価内容による 検査 ※評定等の評価内容による 鉄筋の余長の長さ 構造関係共通図(配筋標準図)による。これによらない箇所は図示による。
	⑥ 鉄筋のかぶり厚さ及び間隔(溶接金網含む)	最小かぶり厚さ(目地底から算出を行う) ※図示による(構造関係共通図(配筋標準図)4(1)表4.1) ・図示による ( ) (5.3.5) 柱及び梁の主筋にD29以上の使用 ・あり 適用箇所 ( ) 主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保する 耐久性上不利な部分(傷害等を受けるおそれのある部分等) ・あり 適用箇所 ( ) ・最小かぶり厚さに加える厚さ ( )mm
	⑦ 各部配筋	※図示による (5.3.7)

⑤	① 鉄筋	鉄筋の種類 (5.2.1) 種類の種類 種類の種類 呼び径 (mm) 備考
	② 溶接金網	形状等 (5.2.2) 種類 種類の種類 鉄線の形状、網目寸法、鉄線の径 (mm) 使用部位
	③ 鉄筋の継手	鉄筋の継手方法等 (5.3.4) 部位 継手方法 呼び径 (mm)

⑤	⑧ 溶接継手	適用箇所 ・図示による ( ) (5.6.3.5) H12建造第1463号に適合する性能 ・A級 溶接継手の工法 ・図示による ( ) 鉄筋相互のあき ・標準仕様書5.3.5(4)による ・評定等の評価内容による ・図示による ( ) 施工完了後の溶接部の試験 ・外観試験 試験対象 ※全数 試験項目 ・評定等の評価内容による 試験方法 ・評定等の評価内容による ・超音波測定試験 試験対象 ・抜取り ロット ・1組の作業班が1日に行った溶接箇所、最大200箇所程度とする 試験の箇所数 ・1ロットに対して ( ) 箇所 ・全数 試験項目 ※内部欠陥の検出 試験方法 ※JIS Z 3063(鉄筋コンクリート用異形棒鋼溶接部の超音波測定方法及び判定基準)による 不合格となった場合の措置
	⑨ 地盤改良工法	種類及び施工方法等 ・図示による ( ) (4.6.2.5) 六価クロム溶出試験 ・行う
	⑩ 地盤補強工法	○Fコア <sup>®</sup> ISR工法

⑥ コンクリート工事	① コンクリートの種類等 (6.2.1)	種類 ※I類 (JIS A 5308 への適合を認証されたコンクリート) ・II類 (I類以外でJIS A 5308 に適合したコンクリート) 普通コンクリート (6.2.1~6.2.4) <table border="1"> <tr> <th>設計基準強度 (N/mm<sup>2</sup>)</th> <th>気乾単位容積質量 (t/m<sup>3</sup>)</th> <th>スランプ</th> <th>適用箇所</th> </tr> <tr> <td>24</td> <td>2.3程度</td> <td>・15又は18</td> <td>基礎コンクリート 土間コンクリート</td> </tr> <tr> <td>18</td> <td>・</td> <td>・15又は18</td> <td>捨てコンクリート</td> </tr> </table> 構造体強度補正値(S) (6.3.2) ※標準仕様書表6.3.2による 補正値S=3 (地域温度補正期間の最新版による) S=6 (地域温度補正期間の最新版による)	設計基準強度 (N/mm <sup>2</sup> )	気乾単位容積質量 (t/m <sup>3</sup> )	スランプ	適用箇所	24	2.3程度	・15又は18	基礎コンクリート 土間コンクリート	18	・	・15又は18	捨てコンクリート				
	設計基準強度 (N/mm <sup>2</sup> )	気乾単位容積質量 (t/m <sup>3</sup> )	スランプ	適用箇所														
	24	2.3程度	・15又は18	基礎コンクリート 土間コンクリート														
	18	・	・15又は18	捨てコンクリート														
	② セメント (6.3.1)	種類 ※普通ポルトランドセメント、高炉セメントA種、シリカセメントA種又はフライアッシュセメントA種 適用箇所 (※下記以外全て) 普通ポルトランドセメントの品質は、JIS R 5210 に示された規定の他、水和熱が7日目で 352 J/g以下、かつ28日目で 402 J/g以下のものとする。 ・高炉セメントB種 (6) 適用箇所 (・1Fより下部 (立上り部含む)) ・フライアッシュセメントB種 (6) 適用箇所 (・)																
	③ 骨材 (6.3.1)	アルカリシリカ反応性による区分 ※A・B (コンクリート中のアルカリ総量が 3.0 kg/m <sup>3</sup> 以下)																
	④ 混和材料 (6.3.1)	混和剤の種類 ※標準仕様書6.3.1(4)(a)による ・混和材の種類 ※標準仕様書6.3.1(4)(b)による																
	5 打継ぎの位置、ひび割れ誘発目地、打継ぎ目地 (6.6.4)	打継ぎの位置 梁及びスラブ ※スパンの中央又は端から1/4の付近 ・図示による ( ) 柱及び壁 ※スラブ、壁梁又は基礎の上端 ・図示による ( ) 目地の寸法 (6.6.4)(6.8.1)(9.7.3) ・標準仕様書 9.7.3(1)(7)による ※ひび割れ誘発目地、打継ぎ目地の深さ寸法は、躯体外側の打増し部で処理する ・図示による ( ) ひび割れ誘発目地の位置、形状 (6.8.1)(11.1.3) ・図示による ( )																
	6 湿潤養生 (6.7.2)	湿潤養生の期間 ・セメントの種類が普通エコセメントの場合 ( ) 日																
	7 構造体コンクリートの仕上り (6.2.5)(6.8.2)	合板せき板を用いるコンクリートの打放し仕上げ <table border="1"> <tr> <th>種別</th> <th>適用箇所</th> </tr> <tr> <td>・A種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> <tr> <td>・B種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> <tr> <td>・C種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> </table> コンクリートの仕上りの平たんさ <table border="1"> <tr> <th>種別</th> <th>適用箇所</th> </tr> <tr> <td>・a種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> <tr> <td>・b種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> <tr> <td>・c種</td> <td>※図示による ( )</td> </tr> </table>	種別	適用箇所	・A種	※図示による ( )	・B種	※図示による ( )	・C種	※図示による ( )	種別	適用箇所	・a種	※図示による ( )	・b種	※図示による ( )	・c種	※図示による ( )
	種別	適用箇所																
	・A種	※図示による ( )																
	・B種	※図示による ( )																
・C種	※図示による ( )																	
種別	適用箇所																	
・a種	※図示による ( )																	
・b種	※図示による ( )																	
・c種	※図示による ( )																	
8 打増し厚さ (打放し仕上げ部) (6.8.1)	打増し厚さ ・打放し仕上げの打増し厚さ (外部に面する部分に限る) ・20mm ・打放し仕上げの打増し厚さ (内部に面する部分に限る) ・10mm ・20mm ・外装タイル後張り面の打増し処理 ・20mm 打増し範囲 ・図示による ( )																	
⑨ 型枠 (6.8.2)	せき板の材料及び厚さ (6) ・合板 (※12mm) コンクリート打設時の変位性の確認のため、型枠の一部に透明型枠等を使用する場合は、強度、変形等について、事前に監督員と協議する。 ・断熱材を兼用した型枠の使用 適用箇所 ( ) ・MCR工法用シートの使用 適用箇所 ( ) 打増し厚さ ( ) 打増し範囲 ( ) スリーブの材質・規格等 ( ) ・図示による ( )																	
10 軽量コンクリート (6.10.1, 2)	適用箇所 ( ) ・図示による ( ) 種類 ・1種 ・2種 気乾単位容積質量 ・標準仕様書表6.10.1による スランプ ※21cm																	
11 寒中コンクリート (6.11.1, 2)	適用期間 (月 日~月 日) 構造体強度補正値(S)を換算温度を基に定める場合 ・図示による ( )、S=( )																	
12 暑中コンクリート (6.12.2)	適用期間 (月 日~月 日) 構造体強度補正値(S) ※N/mm <sup>2</sup> ( )、S=( )																	
13 マスコンクリート (6.13.1, 2)	適用箇所 ( ) ・図示による ( ) セメントの種類 ・普通ポルトランドセメント ・高炉セメントB種 ・シリカセメント 混和剤の適用 ・あり (標準仕様書6.13.2(2)(7)による) (標準仕様書6.13.2(2)(4)による) スランプ ※15cm 構造体強度補正値(S) ※標準仕様書表6.13.1による																	

⑦ 鉄骨工事	14 無筋コンクリート (6.14.1)	コンクリートの種類 ※普通コンクリート セメントの種類 ※普通ポルトランドセメント、高炉セメントA種、シリカセメントA種又はフライアッシュセメントA種 ・高炉セメントB種 (6) ・フライアッシュセメントB種 (6) 設計基準強度 ※18 (N/mm <sup>2</sup> ) スランプ ※15cm又は18cm 適用箇所 ※標準仕様書6.14.1(4)による箇所 ( ) 実施要領 (1)単位水量の測定は、150m <sup>3</sup> に1回以上及び落下時に品質の異常が認められた時に実施する。 (2)単位水量の上限値は、標準仕様書6.3.2(4)(c)による。 (3)単位水量の管理目標値は次の通りとして、施工する。 1)測定した単位水量が、計画調合書の設計値(以下、「設計値」という。)±15kg/m <sup>3</sup> の範囲にある場合はそのまま施工する。 2)測定した単位水量が、設計値±15kg/m <sup>3</sup> の範囲にある場合は、水量変動の原因を調査するとともに生コン製造者に改善を指示し、その運搬車の生コンは打放す。その後、設計値±15kg/m <sup>3</sup> 以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 3)設計値±20kg/m <sup>3</sup> を超える場合は、生コンを打込まずに持ち帰らせ、水量変動の原因を調査するとともに生コン製造者に改善を指示しなければならない。その後、全運搬車の測定を行い設計値±20kg/m <sup>3</sup> 以内であることを確認する。更に、設計値±15kg以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 (4)3)の不合格生コンを確実に持ち帰ったことを確認する。 (5)単位水量管理についての記録を計画調合書、製造管理記録、打込み時の気温、コンクリート温度等)と写真により提出する。 (6)単位水量の測定方法は、高周波誘電加熱乾燥法(電子レンジ法)、174-4法又は静電容量測定法による。また、試験機関は該当コンクリート製造所以外の機関とする。															
	19 コンクリートの単位水量測定 (7.1.8)	鉄骨製作場の加工能力 建築基準法第77条の56に基づき国土交通大臣から性能評価機関として認定を受けた(株)日本鉄骨評価センター及び(株)全国鉄骨評価機構(旧(社)全国鉄骨工業協会の「鉄骨製作場の性能評価基準」により評価を受け、国土交通大臣から認定を受けた工場、又は同等以上の能力のある工場 評価の区分 ( ) グレード以上 (指定しない) ・監督員の承諾する工場 (標準仕様書7.1.1以外の適用範囲に限る)															
	2 施工管理技術者 (7.1.3, 4)	配置する ( )															
	3 鋼材 (7.2.1)	種類等 <table border="1"> <tr> <th>種類の記号</th> <th>適用箇所 (主要な部分)</th> <th>規格</th> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・JIS規格による</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・JIS規格による</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・JIS規格による</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> <td>・JIS規格による</td> </tr> </table> 溶接亜鉛めっき工法の適用箇所 ( ) 板厚方向に引張力を受ける鋼板の試験 (7.2.10) ・行う 適用箇所 ( ) ・行わない ボルトの種類 (7.2.2) ・トルシア高力ボルト (JIS高力ボルト) ・溶融亜鉛めっき高力ボルト ボルトのねじの呼び ( ) ・図示による ( ) ボルトの縁端距離、ボルト間隔、ゲージ等 (7.3.2) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-1 縁端距離及びボルト間隔) JIS高力ボルトの締付け (本締め) (7.4.7) ナットの回転法の場合で、ボルトの長さがねじの呼びの5倍を超える場合の回転量 ( ) ・図示による ( ) 摩擦面の処理方法等 (7.4.2)(7.12.5) 溶融亜鉛めっき以外 ※標準仕様書7.4.2(1)による 溶融亜鉛めっき面 ・プラスト処理 (表面粗度 $\mu\text{m}$ Rz以上) ・プラスト処理以外の特別な処理方法 ・図示による ( ) すべり試験 ・行う (※すべり係数試験・すべり耐力試験) 試験の方法等 ( ) ・図示による ( )	種類の記号	適用箇所 (主要な部分)	規格	・	・	・JIS規格による	・	・	・JIS規格による	・	・	・JIS規格による	・	・	・JIS規格による
	種類の記号	適用箇所 (主要な部分)	規格														
	・	・	・JIS規格による														
	・	・	・JIS規格による														
	・	・	・JIS規格による														
	・	・	・JIS規格による														
	4 高力ボルト (7.2.2)	ボルト及びナットの材料 (7.2.3)(7.5.2) ・標準仕様書表7.2.3(JIS附属書)又は次による ボルトの規格は JIS B 1180 とする。 (ボルトの種類は、呼び径六角ボルト又は全ねじ六角ボルトとし、材料は鋼とする。ボルトの強度区分は、4.6又は4.8とする。なお、呼び径六角ボルトの軸径の最大寸法は、ボルトの径の値以下とする。ナットの規格は、JIS B 1181 とする。ナットの種類は、六角ナット-Cとし、材料は鋼とする。) ボルトのねじの呼び ( ) ・図示による ( ) 合金 ※ JIS B 1256 による 戻り止め ※二重ナット ボルトの縁端距離、ボルト間隔、ゲージ等 (7.3.2) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-1 縁端距離及びボルト間隔)															
	5 普通ボルト (7.2.3)(7.5.2)	ボルトのねじの呼び ( ) ・図示による ( ) 合金 ※ JIS B 1256 による 戻り止め ※二重ナット ボルトの縁端距離、ボルト間隔、ゲージ等 (7.3.2) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-1 縁端距離及びボルト間隔)															
	6 アンカーボルト (7.2.4)(7.10.3)	構造用アンカーボルト (JIS B 1220) 種類 ・ABR400 ・ABR490 ・建方用アンカーボルト (JIS G 3101) 種類 ・SS400 アンカーボルト及びナットのねじの公差域クラス及び仕上げの程度 ※標準仕様書表7.2.3による ボルトの縁端距離、ボルト間隔、ゲージ等 (7.3.2) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-1 縁端距離及びボルト間隔)															
	7 溶接材料 (7.2.5)	溶接材料 ・標準仕様書7.2.5(1)、(2)による ・標準仕様書7.2.5(1)、(2)以外の溶接材料 材料及び使用箇所 ( ) ・図示による ( )															
8 ターンバックル (7.2.6)	種類 建築用ターンバックル ・羽子板ボルト 建築用ターンバックル調 ・割棒式 ねじの呼び ( ) ・図示による ( )																

9 床構造用のデッキプレート	材質、形状及び寸法 (7.2.7)(7.7.9)	<table border="1"> <tr> <th>種類</th> <th>適用箇所</th> <th>材質・形状・寸法</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>・デッキプレート</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・単独の構造</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・デッキプレートとコンクリートとの合成スラブとする構造</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table> 開口部補強要領 (補強筋の定着長さ等を含む) ・図示による ( ) 鉄骨部材への溶接方法 ・図示による ( ) 耐火認定 ・あり (耐火時間 ( ) ・図示による ( ) 頭付きスタッド (JIS B 1198) の種類等 (7.2.8)(7.7.6) <table border="1"> <tr> <th>呼び名</th> <th>呼び長さ (mm)</th> <th>適用箇所</th> </tr> <tr> <td>・16</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・19</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・22</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table> スタッド溶接完了後、外観試験及び打撃曲げ試験を行う。 (7.2.9)	種類	適用箇所	材質・形状・寸法	備考	・デッキプレート	・	・	・	・単独の構造	・	・	・	・デッキプレートとコンクリートとの合成スラブとする構造	・	・	・	呼び名	呼び長さ (mm)	適用箇所	・16	・	・	・19	・	・	・22	・	・
	種類	適用箇所	材質・形状・寸法	備考																										
	・デッキプレート	・	・	・																										
	・単独の構造	・	・	・																										
	・デッキプレートとコンクリートとの合成スラブとする構造	・	・	・																										
	呼び名	呼び長さ (mm)	適用箇所																											
	・16	・	・																											
	・19	・	・																											
	・22	・	・																											
	10 スタッド (7.2.8)(7.7.6)	試験の要領 (7.6.3) 試験による ( )																												
	11 柱底均しモルタル (7.2.9)	無収縮モルタルとする場合の材料、割合等 ※標準仕様書7.2.9(2)(7)から(1)による																												
	12 製作精度 (7.3.3)	鉄骨の製作精度は、JASS 6 付則6.鉄骨精度検査基準に加えて、次による。 (7.3.3) 差しダイヤラムの突合せ継手の食い違いの寸法 ※H12建造第1464号第二号(2)による アンダーカットの寸法 ※H12建造第1464号第二号(3)による 食い違い・仕口のずれの検査方法及び補強方法 ・「突合せ継手の食い違い仕口のずれの検査・補強マニュアル」による																												
	13 溶接作業を行う技能資格者の技量付加試験 (7.6.3)	試験の要領 (7.6.3) 試験による ( )																												
14 溶接接合 (7.6.4)	開先の形状 (7.6.4) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-2 溶接継手の種類別開先標準) 鋼製エンドタブの切断する部分 (7.6.7) 切断する場所 ( ) 切断範囲 ・鋼製エンドタブ、裏当て金等は、梁フランジ等の端から 5mm 以上残して直線上に切断する。なお、切断線が交差する場合は、交差部をアール状に加工する。 切断面の仕上げ (7.6.7) ・標準仕様書7.6.7(1)(b)(2)による 完全溶込み溶接 (7.6.12) 板厚が異なる場合の突合せ継手 低応力高サイクル疲労を受ける部位 ・図示による ( ) スカラップの形状 (7.6.12) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-4(4)改良型スカラップ)																													
15 入熱、パス間温度の管理 (7.6.12)	適用箇所 ( ) ・図示による ( ) H12建造第1464号第二号に関する外観試験方法等 (7.6.12) ・「突合せ継手の食い違い仕口のずれの検査・補強マニュアル」3.5.2 受入検査による ※抜き取り検査② ・抜き取り検査① JASS 6 付則6 [鉄骨精度検査基準] の付表3「溶接」に関する確認方法等 (7.6.12) ・JASS 6 10.4 [受入検査] e. 溶接部の外観検査(1)から(5)までによる。ただし、完全溶込み溶接部の外観検査の採取箇所は、超音波探傷試験の試験箇所と同一とする。外観試験の不合格箇所は、すべて標準仕様書7.6.13による補修を行い、再試験する。																													
16 溶接部の試験 (7.6.12)	完全溶込み溶接部の超音波探傷試験 (7.6.12) 工場溶接の場合 <table border="1"> <tr> <th>節</th> <th>全</th> <th>部</th> </tr> <tr> <td>・全</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・部</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table> 検査水準 ※第6水準 ・全数 工事現場溶接の場合 ※全数	節	全	部	・全	・	・	・部	・	・																				
節	全	部																												
・全	・	・																												
・部	・	・																												
17 錆止め塗装 (7.8.2)	塗装の範囲 (7.8.2) 耐火被覆材の接着する面 ( ) ・図示による ( ) 耐火被覆材の接着する面以外 ( ) ※標準仕様書7.8.2(1)(7)-(7)による部分以外 ・図示による ( )																													
18 耐火被覆 (7.9.2~8)	種類の種類、材料、工法等 (7.9.2~8) <table border="1"> <tr> <th>種類</th> <th>材料・工法</th> <th>性能 (耐火時間)</th> <th>適用箇所 (部位・部分)</th> </tr> <tr> <td>・耐火材吹付け</td> <td>・乾式吹付け ・湿式ロックウール ・半乾式吹付け</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・耐火板張り</td> <td>・繊維混入けい酸 ・カルシウム板</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・耐火材巻付け</td> <td>・高断熱ロックウール</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・ラス張りモルタル塗り</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・耐火塗料</td> <td>・</td> <td>・</td> <td>・</td> </tr> </table>	種類	材料・工法	性能 (耐火時間)	適用箇所 (部位・部分)	・耐火材吹付け	・乾式吹付け ・湿式ロックウール ・半乾式吹付け	・	・	・耐火板張り	・繊維混入けい酸 ・カルシウム板	・	・	・耐火材巻付け	・高断熱ロックウール	・	・	・ラス張りモルタル塗り	・	・	・	・耐火塗料	・	・	・					
種類	材料・工法	性能 (耐火時間)	適用箇所 (部位・部分)																											
・耐火材吹付け	・乾式吹付け ・湿式ロックウール ・半乾式吹付け	・	・																											
・耐火板張り	・繊維混入けい酸 ・カルシウム板	・	・																											
・耐火材巻付け	・高断熱ロックウール	・	・																											
・ラス張りモルタル塗り	・	・	・																											
・耐火塗料	・	・	・																											

20 アンカーボルト等の設置	20 アンカーボルト等の設置 (7.10.3)	※JASS6 付則6 [鉄骨精度検査基準] 付表5 [工事現場] による (7.10.3) 構造用アンカーボルトの形状及び寸法 ・図示による ( ) 構造用アンカーフレームの形状及び寸法 ・図示による ( ) 建方(及び付属鉄骨)用アンカーボルトの保持及び埋込み工法 (標準仕様書表7.10.1) 種類 ・A種 ・B種 柱底均しモルタルの厚さ及び工法の種類 (標準仕様書表7.10.2) 厚さ 種類 ・A種 ・B種 種別等 (7.12.4)(表14.2.2)												
	21 溶融亜鉛めっき (7.12.4)(表14.2.2)	<table border="1"> <tr> <th>垂れめっきの種類</th> <th>材料</th> <th>適用部位</th> </tr> <tr> <td>・A種</td> <td>最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・B種</td> <td>最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板</td> <td>・</td> </tr> <tr> <td>・C種</td> <td>普通ボルト・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.0mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板</td> <td>・</td> </tr> </table>	垂れめっきの種類	材料	適用部位	・A種	最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板	・	・B種	最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板	・	・C種	普通ボルト・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.0mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板	・
	垂れめっきの種類	材料	適用部位											
	・A種	最小板厚6.0mm以上の形鋼、鋼板	・											
	・B種	最小板厚3.2mm以上、6.0mm未満の形鋼、鋼板	・											
	・C種	普通ボルト・ナット類、アンカーボルト類 最小板厚2.0mm以上、3.2mm未満の形鋼、鋼板	・											
	22 梁貫通孔の補強 (7.12.4)(表14.2.2)	補強形式 ( ) ・図示による (構造関係共通図(鉄骨標準図)1-6) 適用箇所 ( ) ・図示による ( )												

# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (1)

※修正箇所は下線表示

## 1. 一般事項

(1) 構造図面に記載された事項は、本標準図に優先して適用する。

### (2) 記号

d...異径棒筋の呼び名に用いた数値、丸筋では径 D...部材の成 R...直径  
 ◎...間隔 r...半径 C...中心線 L o...部材間の内法距離 h o...部材間の内法高さ  
 S T...あばら筋 H O O P...帯筋 S. H O O P...補強帯筋 φ = 直径又は丸筋

## 2. 鉄筋加工、かぶり

※高強度せん断補強筋の加工は、メーカー仕様書に従う。

### (1) 鉄筋末端部の折曲げの形状

折曲げ角度	180°	135°	90°	折り上げ角度90°はスラブ筋・壁筋の末端部またはスラブと肉厚に打ち込むT形およびL形鋼のキャップタイのみ用いる。
図				
鉄筋の余長	4d以上	6d以上(※4d以上)	8d以上(※4d以上)	
折曲げ内法寸法Rは、SR235~SD345の径16およびD16以下は3d以上、SD295~SD345のD19~D38は4d以上、D41およびSD390は5d以上。				
スラブ筋、壁筋には丸筋は使用しない。				

### (2) 鉄筋中間部の折曲げの形状 鉄筋の折曲げ角度90°以下

図	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折曲げ内法寸法(R)
	帯筋 あばら筋 スパイラル筋	SR235, SR295 SD295A・B SD345	16φ以下 D16 19φ以上 D19	3d以上 4d以上
	上記以外の鉄筋	SD295A・B SD345 SD390	D16以下 D19~D25 D29~D41	6d以上 8d以上

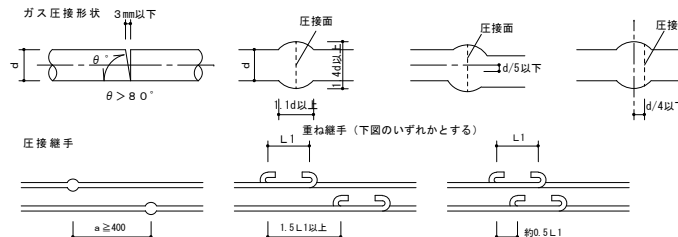
### (3) 鉄筋の定着及び重ね継手の長さ

JASS 5(2009)による(JASS5(2009) P323~325, P333 参照)

鉄筋の種類	鉄筋の径φ	定着の長さ		特別の定着及び重ね継手の長さ(L1)
		一般(L2)	下地(φ3)	
SD295A SD295B	3φ~6φ	25dまたは15d フック付き	10d	30dまたは20d フック付き
	2φ	30dまたは20d フック付き	10d	35dまたは25d フック付き
SD345	4φ~6φ	40dまたは30d フック付き	10d	45dまたは35d フック付き
	3φ~4φ	30dまたは20d フック付き	10d	35dまたは25d フック付き
SD390	4φ~6φ	40dまたは30d フック付き	10d	50dまたは35d フック付き
	3φ~4φ	35dまたは25d フック付き	10d	40dまたは30d フック付き

[注] 許容応力度計算、許容応力度等計算、その他構造計算を要さない小規模建築物の場合は、梁主筋の柱への定着は4dとする。

1. 末端のフックは、定着及び重ね継手の長さに含まない
2. 継手位置は、応力の小さい位置に設けることを原則とする
3. 直径の異なる鉄筋の重ね継手長さは、細い方の鉄筋の継手長さとする
4. D29以上の異径鉄筋は、原則として、重ね継手としてはならない
5. 鉄筋径の差が7mmを超える場合は、圧接してはならない



### (4) かぶり厚さ(単位: mm)

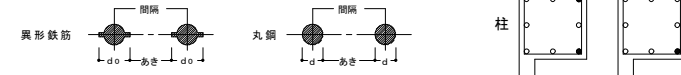
ひびわれ誘発目地部など鉄筋のかぶり厚さが部分的に減少する箇所についても最小かぶり厚さを確保する

部位	設計かぶり厚さ(mm)		最小かぶり厚さ(mm)
	屋外	屋内	
土に接しない部分	屋根スラブ	30	20
	床スラブ	40	30
土に接する部分	柱・梁	50	40
	基礎・擁壁	70	60

- (1) 耐火性や耐火性向上のため、工事監理者の承認を受けて40mmとすることがある。
- (2) 耐火性や耐火性向上のため、工事監理者の承認を受けて40mmとすることがある。
- (3) コンクリートの品質および施工方法に応じ、工事監理者の承認を受けて40mmとすることができる。
- (4) 軽量コンクリートの場合は、10mm増しの値とする。
- (5) ( )内は仕上げがある場合。
- (6) 土に接する部分のかぶりは増加する厚さを打ち増しとする。

## (5) 鉄筋のあき

丸筋では径、異径鉄筋では呼び名に用いた数値の1.5d以上  
 種骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ2.5以上

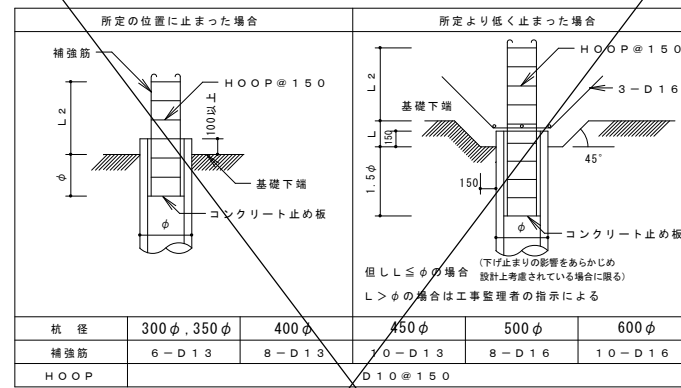


## (6) 鉄筋のフック(a~fに示す鉄筋の末端にはフックを付ける)

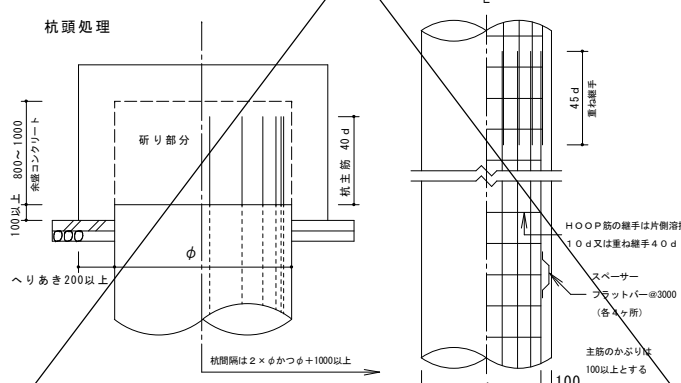
- a. 丸筋
- b. あばら筋、帯筋
- c. 煙突の鉄筋
- d. 柱、梁(基礎梁を除く)の出すみ部分の鉄筋(右図参照)
- e. 単純梁の下地筋
- f. その他、本配筋標準図に記載する箇所

## 3. 杭 (地震力等の水平力を考慮する必要がある場合は、別途検討すること)

### (1) PRC杭、又はPHC杭の全てに補強を行う

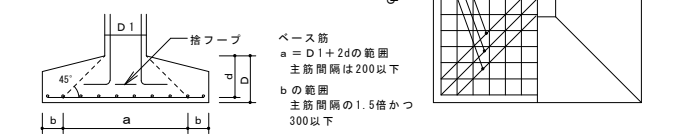


### (2) 場所打ちコンクリート杭

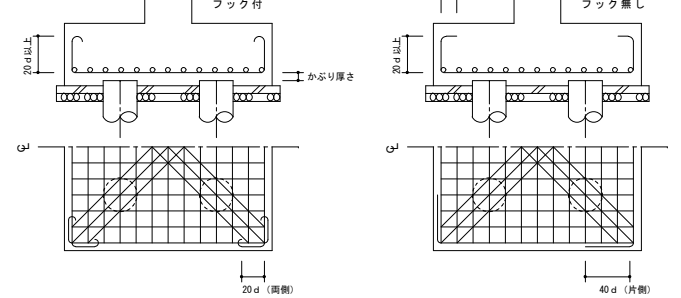


## 4. 基礎

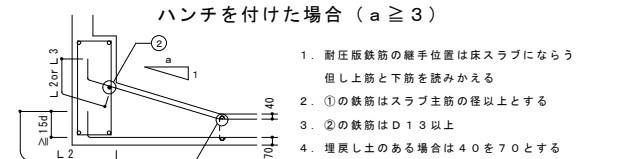
### (1) 直接基礎



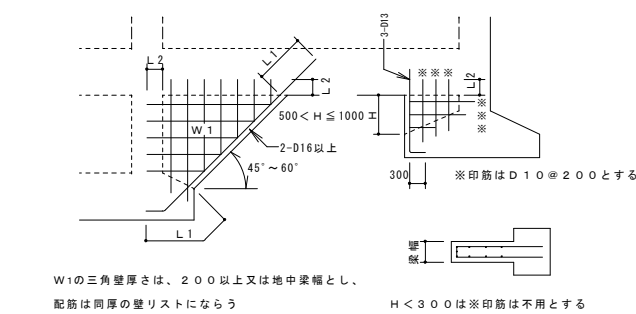
### (2) 杭基礎



## (3) ベタ基礎

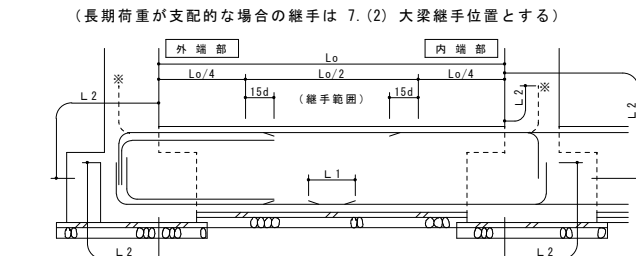


## (4) 基礎接合部の補強

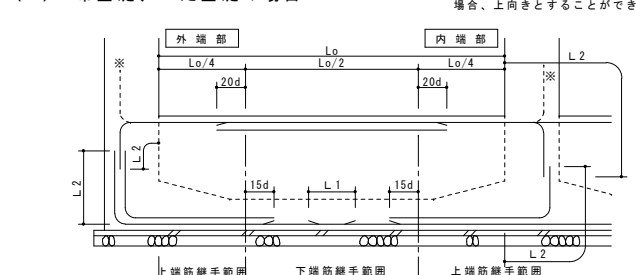


## 5. 地中梁

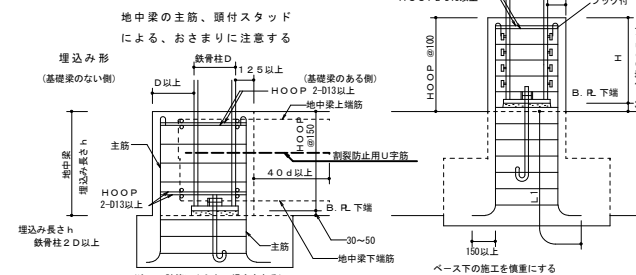
### (1) 独立基礎、杭基礎の場合



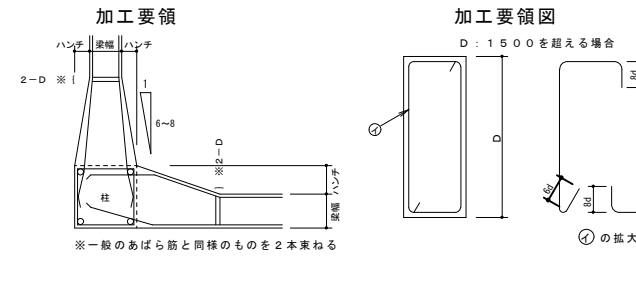
### (2) 布基礎、べた基礎の場合(定着、継手)



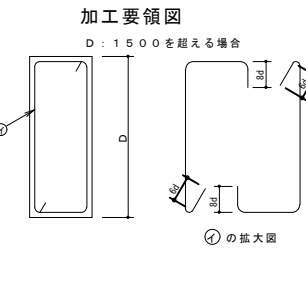
### (3) 小規模鉄骨造の柱脚固定の配筋



### (4) 水平ハンチの場合のあばら筋加工要領

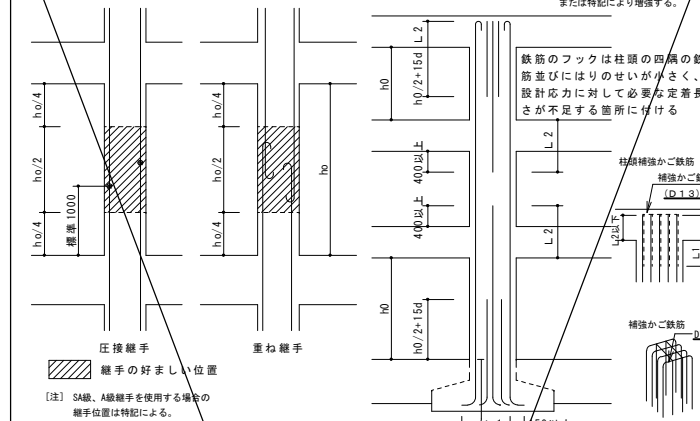


### (5) せいの高い梁のあばら筋加工要領

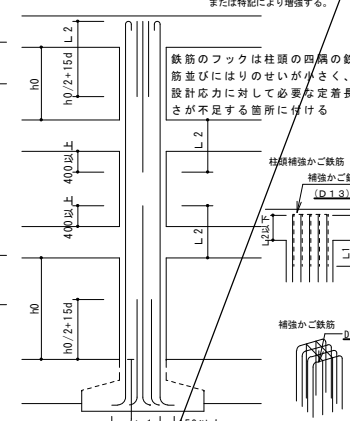


## 6. 柱

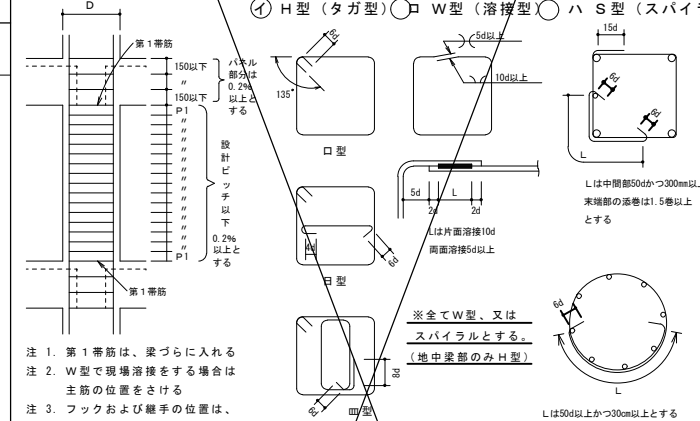
### (1) 柱主筋の継手



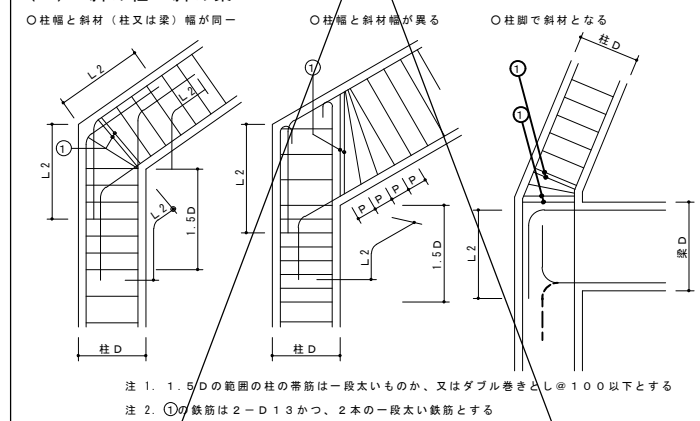
### (2) 柱主筋の定着



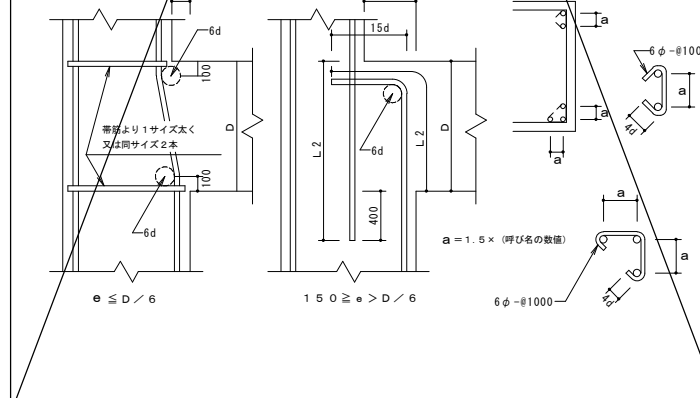
### (3) 帯筋



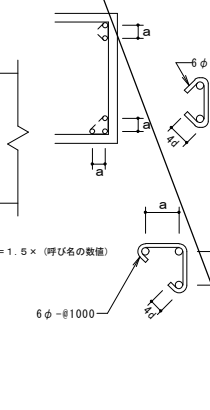
### (4) 斜め柱・斜め梁



### (5) 絞り



### (6) 二段筋の保持



# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (2)

L=鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)の2-(3)による。

## 7. 大梁、小梁、片持梁

(1) 定着

① 大梁の定着

② 小梁の定着

③ 片持梁の定着

(2) 大梁主筋の継手

(3) あばら筋、腹筋、幅止めの配置

(4) あばら筋の型

(5) 幅止め筋の本数、加工

(6) 土間コンクリート

(7) 釜場

(8) 打継ぎ補強(ダマ穴打継ぎについて)

●設計配筋間隔の1/2ピッチ 長さ2×L1以上  
●無筋部分D10×200 長さ800以上

## 8. 床板

(1) 定着および継手

① 片持床スラブ

② 一般床スラブ

(2) 屋根スラブの補強

(3) 片持ちスラブ出隅部補強

(4) 床板開口部の補強(開口の径500程度の場合)

(5) 床板段差

(6) 土間コンクリート

(7) 釜場

(8) 打継ぎ補強(ダマ穴打継ぎについて)

●設計配筋間隔の1/2ピッチ 長さ2×L1以上  
●無筋部分D10×200 長さ800以上

## 9. 壁

(1) 定着

① 梁に

② 柱に(平面図)

③ 床に(非耐力壁とスラブが取り合う場合)

④ 壁と壁(平面図)

(2) スリット部(設計図に記入があるとき)

完全スリット

部分スリット

(3) 手摺、ハラベット

手摺

ハラベット

(4) コンクリートブロック帳壁

一般の場合

下部防水立上りのある場合

## (2) 梁

補強筋は、梁主筋の1段落し径(D16以上)とする。  
●あばら補強筋は、梁と同径、同ピッチとする。  
●腹筋D10ピッチは、梁の腹筋と合せる。  
●D≧400の場合は補強筋を3本とする。  
●aは100~200程度。  
●梁下端増打コンクリートの場合も上端増打コンクリート補強と同様とする。  
●ハッチ部分は増打コンクリートを示す。

## 11. 梁貫通孔補強

(1) 設置可能範囲

梁端部(スパンLo/10以内かつ2D以内)は原則として避ける

(2) 鉄筋標準配筋

●φ1とφ2の差はφ≧D/3とする

80≦φ≦100 折筋 2-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13	100<φ≦150 折筋 2-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13@50 横筋 2-(2-D13) 上下縦筋 ST 2-D13@50	150<φ≦250 斜筋 4-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13@50 横筋 2-(2-D13) 上下縦筋 ST 2-D13@50
---	---	---

※部分について計算で確認された場合は左記の位置、形式によらずに良い。

(3) 既製品(使用する際には、設計者及び工事監理者と打合せのこと)

ウェブレ、ダイヤレン等 日本建築センター評価取得品とする。  
施工前に計算書を提出し、承認を得ること。  
設計時に使用する評価取得品については計算書を提出する事。  
●リング型 □パイプ型 □金網型 □プレート型  
※補強筋の適用範囲は、評定書の取得範囲とする。  
※孔の径が梁せいの1/10以下、かつ、100mm未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げるにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

## 12. 増築予定

(1) 柱、梁 (2) 地中梁 (3) 床板、壁

●印は補強筋

●印は補強筋

## 10. 柱、梁増打コンクリート補強

(1) 柱

●印は補強筋

●印は補強筋

# 木造在来軸組工法標準図 (1)

## 1. 一般事項

- (1) 構造図面に記載された事項は、本標準図に優先して適用する。
- (2) 施工の際は本標準図の他、「木造住宅工事共通仕様書(解説付)」(財)住宅金融普及協会「木造軸組工法住宅 接合部の設計と金物の取付」(社)日本木造住宅産業協会等参照のこと。
- (3) 床組 下記●印で選択した床組を適用する
  - 剛な床組
  - 柔な床組

## 2. 金物

- (1) 使用する金物は、(財)日本住宅・木造技術センターの定める規格によるZマーク表示品または、これと同等以上のものを使用する。
- (2) 接合及び補強をするに当たっては、接合部位の納まりに適した金物を使用すること。
- (3) 接合金物の許容耐力一覧表

名称	記号	短期許容耐力 (kN)			使用接合具等
		べいまつ類	べいつが類	すぎ類	
太めくぎ	ZN 40	0.86	0.77	0.68	
	ZN 65	0.86	0.77	0.68	
	ZN 90	1.26	1.14	0.98	
スクリューくぎ	ZS 50	1.48	1.34	1.17	
柱脚金物	PB-33	11.38	10.40	10.00	六角ボルト M12(1本)
	PB-42	22.76	20.80	20.00	六角ボルト M12(2本)
ひら金物	SM-12	1.72	1.54	1.36	太めくぎ ZN65(4本)
	SM-40	4.30	3.85	3.40	太めくぎ ZN65(12本)
ひねり金物	ST-9	1.72	1.54	1.36	太めくぎ ZN40(4本)
	ST-12				
折曲げ金物	SF	2.58	2.31	2.04	太めくぎ ZN40(6本)
くら金物	SS	5.16	4.62	4.08	
羽子板ボルト	SB-F, SB-F2	5.69	5.20	5.00	六角ボルト M12(1本)
	SB-E, SB-E2				
かど金物	CP-L	4.30	3.85	3.40	太めくぎ ZN65(10本)
	CP-T				
山形プレート	VP	5.04	4.56	3.92	太めくぎ ZN90(8本)
短ざく金物	S	5.69	5.20	5.00	六角ボルト M12(2本)
かね折り金物	SA				
かすがい	C-120	1.27	1.18	1.08	
	C-150				
手違いかすがい	CC-120				
	CC-150				
引き寄せ金物	HD-B10	11.38	10.40	10.00	六角ボルト M12(2本)
	S-HD10				又はラグスクリュー(LS12)(2本)
	HD-B15	17.07	15.60	15.00	六角ボルト M12(3本)
	S-HD15				又はラグスクリュー(LS12)(3本)
	HD-B20	22.76	20.80	20.00	六角ボルト M12(4本)
	S-HD20				又はラグスクリュー(LS12)(4本)
	HD-B25	28.45	26.00	25.00	六角ボルト M12(5本)
	S-HD25				又はラグスクリュー(LS12)(5本)
	HD-N5	7.56	6.84	5.88	太めくぎ ZN90(6本)
	HD-N10	12.60	11.40	9.80	太めくぎ ZN90(10本)
	HD-N15	20.16	18.24	15.68	太めくぎ ZN90(16本)
	HD-N20	22.68	20.52	17.64	太めくぎ ZN90(20本)
HD-N25	29.48	26.68	22.93	太めくぎ ZN90(26本)	

※ 表値は銅板添え板による25%割増の値を示す。長期許容せん断耐力の値は表値の1/2とする。  
 ※ べいまつ類: べいまつ・くろまつ・あかまつ・からまつ・つが  
 ※ べいつが類: べいひ・べいつが・ひば・ひのき・もみす  
 ※ すぎ類: とどまつ・えぞまつ・べにまつ・スプルース・すぎ・べいすぎ  
 ※ ラグスクリュー(LS12)は首下長11cm以上とし、柱寸法10.5cm角以上の部材に適用される。  
 ※ 算出根拠は、日本建築学会発行の「木質構造設計基準・同解説」による。

(4) アンカーボルト 下記●印で選択したアンカーボルトを適用する

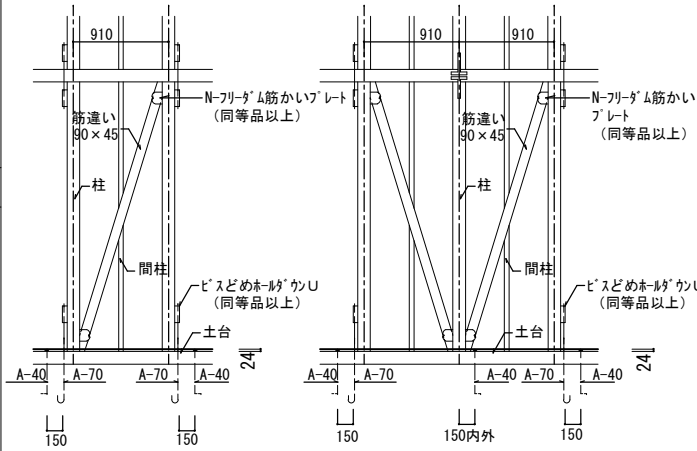
アンカーボルト	M12	L = ○ 400 ● 450 ○ 500	ホールドダウン金物用アンカーボルト
	M16	L = ● 600 ○ 700 ○ 800 ○ 900 ○ 1000	

## 3. 各部構造の施工上の留意点

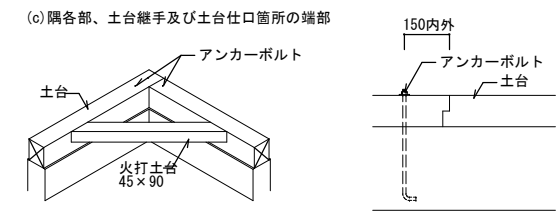
### 1 基礎と土台の繋結

#### (1) アンカーボルトの配置

- (a) 筋違いを設けた耐力壁の部分は両端柱の外側又は、内側の下部に近い位置を原則とする
  - ① ホールドダウン金物をアンカーボルト (A-70) で繋結する場合

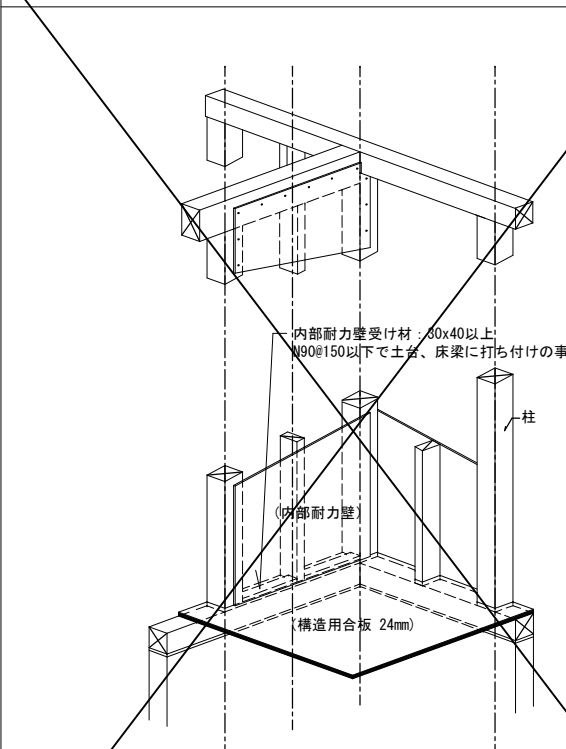


- (b) 構造用合板を張った耐力壁の場合は(c)に準ずる



- (d) 上記(a), (b)及び(c)以外の部分においては間隔2m以内になるような位置とする

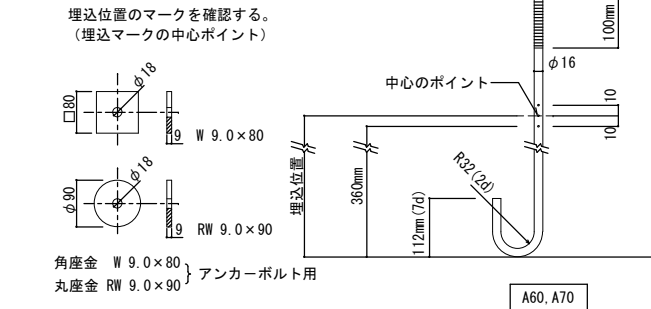
内部耐力壁の床筋ち部の受け材取付け要領図



### (2) アンカーボルトの施工

- (a) アンカーボルトの芯出しは、型板を用いて基準墨に正確に合わせる。
- (b) アンカーボルトのコンクリート基礎への埋め込み長さはA-60, A-70については360mm以上、A-40については250mm以上とする。  
なお、アンカーボルトの先端は土台の上端よりナットの外にねじが3山以上出るように固定する。
- (c) アンカーボルトは、所定の位置に垂直に敷設されるよう位置出し材を布基礎型枠材に打ち込み、アンカーボルトを固定してからコンクリートを打設すること。
- (d) アンカーボルトは、衝撃などにより曲がりが生じないように、慎重に取り扱う。また、ねじ部分には、損傷・錆の発生・汚れ等を防止するために布、ビニールテープなどを巻いて養生を行う。

### (3) アンカーボルトの定着のチェック方法

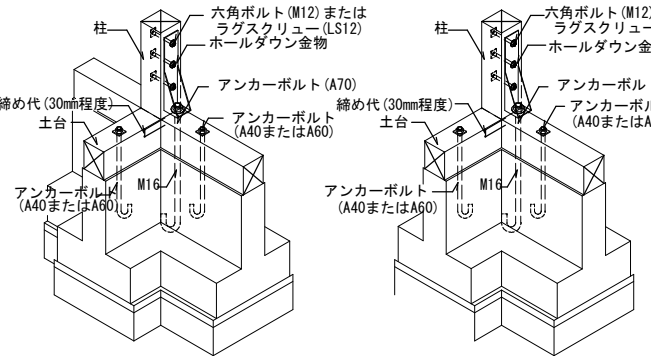


### 2 柱と基礎(土台)との繋結

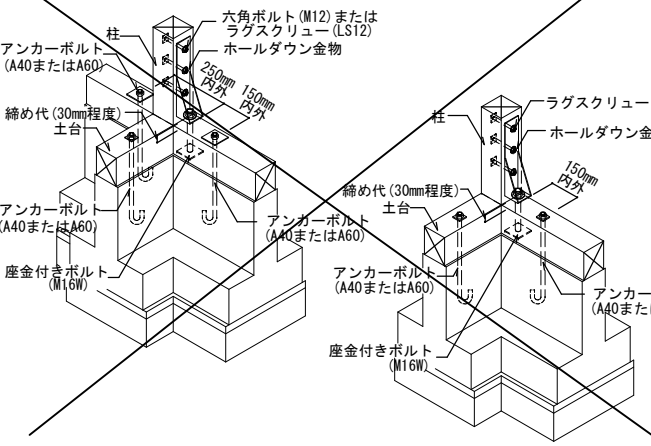
- (a) 柱は、構造計算による引き抜き応力に耐えられるように接合金物(ホールダウン金物)により基礎または土台と繋結する。ホールダウン金物は、柱の下部に締め代を30mm程度とり六角ボルト(M12)、ラグスクリュー(LS12)または太めくぎ(ZN90)にて柱に固定する。

#### (b) 繋結方法は次に示す

- ① ホールドダウン用アンカーボルトを用いて直接基礎に繋結する場合(採用工法)

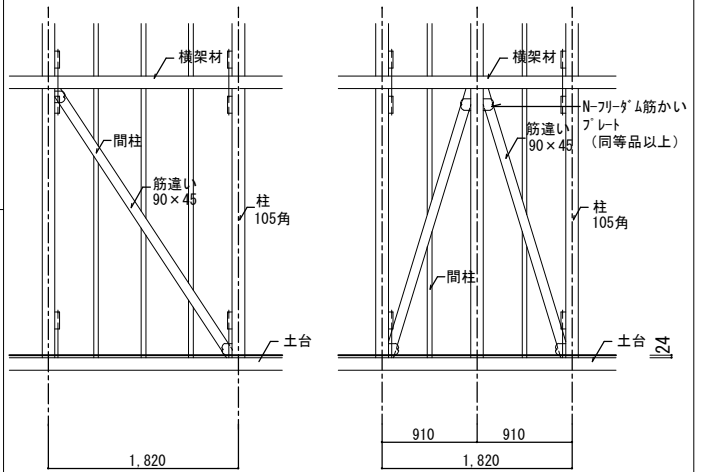


#### ② 座金付きボルト(M16W)を用いて土台と柱を繋結する場合(1階部分に限る)



### 3 筋違いの仕口

筋違いの仕口は筋違いプレート(N-フリーダム筋違いプレート(同等品以上))によって繋結する

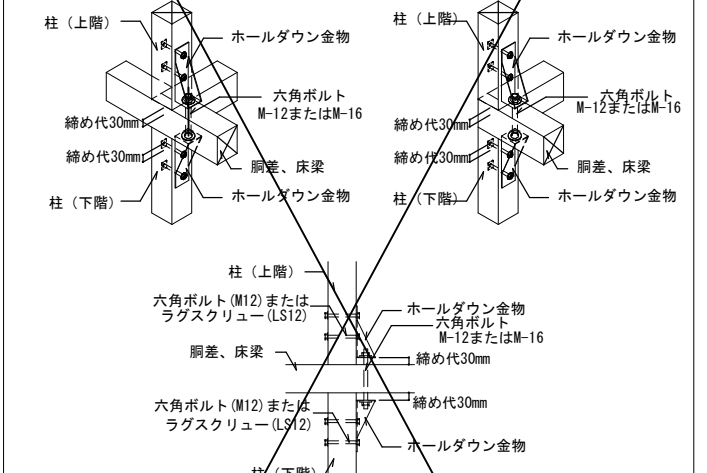


### 4 通し柱

- (a) 通し柱は、次のいずれかによる
  - ① 1階から3階に達する通し柱とする。
  - ② 1階から2階までの通し柱と、2階から3階までの通し柱を組み合わせて使用する場合、当該通し柱と管柱とは接合金物で繋結する。

#### (b) 通し柱に代わる管柱の補強

- 外周部の主要な管柱及び構造計算による引き抜き応力が大きい2階の柱は、1階の管柱と接合金物(ホールダウン金物)で繋結する。ホールダウン金物の取付けは、次に示す。
- ① 上階の柱及び下階の柱にホールダウン金物を用い、柱の下部及び上部に締め代を取り六角ボルト(M12)、ラグスクリュー(LS12)等で各々取付ける。
- ② ホールダウン金物は相互に六角ボルト(M12またはM16)を用いて繋結する。



- (c) 上記(b)以外の構造計算による引き抜き応力が小さい2階柱の接合金物は、短ざく金物(S)、ひら金物(SM-40)等のZマーク表示品、または、これらと同等以上のものとする。

凡例

●	適用事項
○	適用しない項目
○	適用する項目

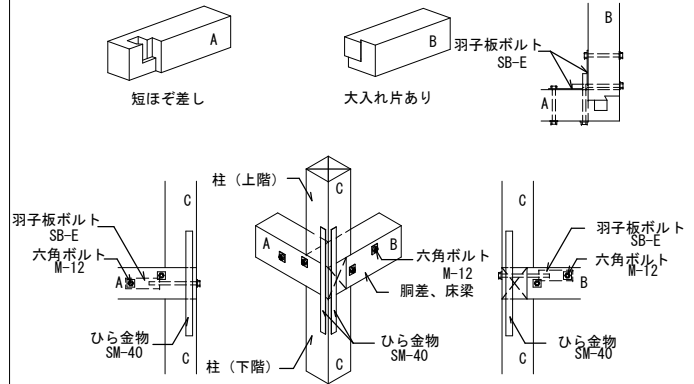
# 木造在来軸組工法標準図 (2)

## (1) 隅柱

### (a) 出隅

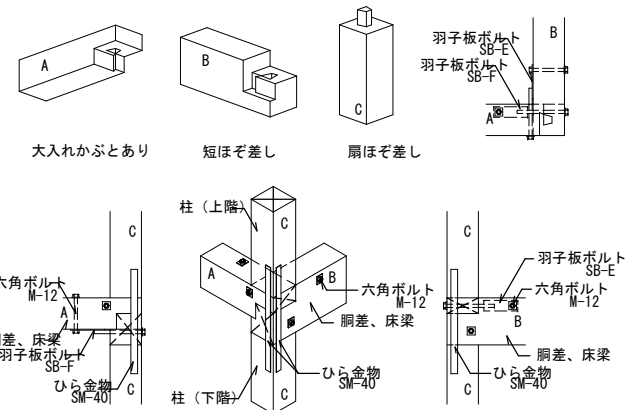
#### ① 直交する胴差がほぼ同寸であり、かつ同一高さで取合う場合

一方の胴差(B)を他方の胴差(A)に大入れ片あり掛け、胴差相互を建物の内側に添えた羽子板ボルト(SB-E)で引き寄せ、上下管柱は胴差(A)に短ほぞ差しとし、管柱出隅両面にひら金物(SM-40)を当て、各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



#### ② 直交する胴差の寸法が異なり段違いに取合う場合

一方の胴差(A)を他方の胴差(B)に大入れ(かぶと)ありに仕掛け、胴差(A)の下部に添寄せた羽子板ボルト(SB-F)で胴差(B)を引寄せ、さらに、胴差(B)の内側に添寄せた羽子板ボルト(SB-E)で胴差(A)を引寄せ、上下管柱はそれぞれ胴差(A,B)に短ほぞ差し、管柱出隅両面にひら金物(SM-40)を当て各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



①, ②共、状況に応じて、かね折り金物(SA)を胴差に対して取り付けのこと。

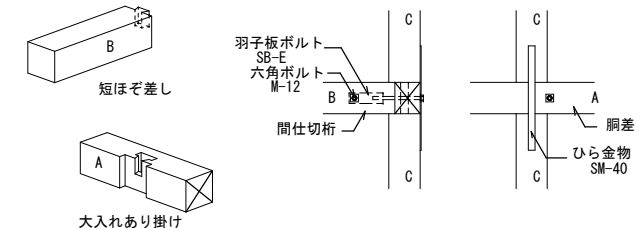
### (b) 入り隅

入り隅は出隅の場合に準ずる。ただし、準ずることが困難な場合には通し柱とする。

## (2) 「隅柱に準ずる柱」の通し柱と同等以上の耐力を有するような補強方法

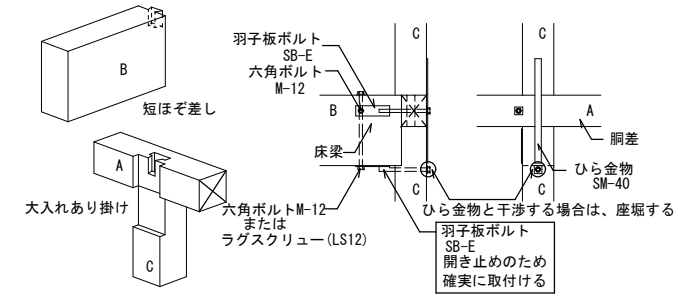
### ① 直交する胴差がほぼ同寸で、かつ、同一高さで取合う場合

間仕切桁(B)は胴差(A)に大入れあり掛け、胴差(A)の間仕切桁(B)より羽子板ボルト(SB-E)で引寄せ、上下管柱は胴差(A)へ短ほぞ差しとし、上下管柱外側にひら金物(SM-40)を当て、各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



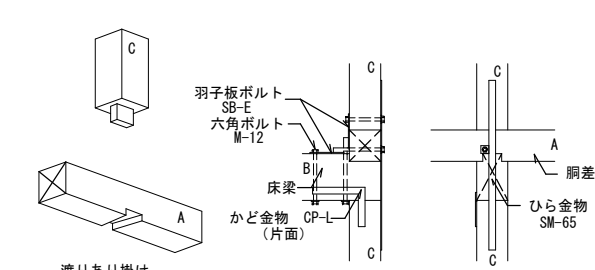
### ② 胴差と直交する梁があり、上端が揃う場合

床梁(B)は胴差(A)に大入れあり掛け、下階柱には大入れ、胴差(B)を床梁(A)及び管柱(C)より羽子板ボルト(SB-E)で引き寄せ、上下管柱は胴差(A)へ短ほぞ差しとし、上下管柱外側にひら金物(SM-40)を当て、各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



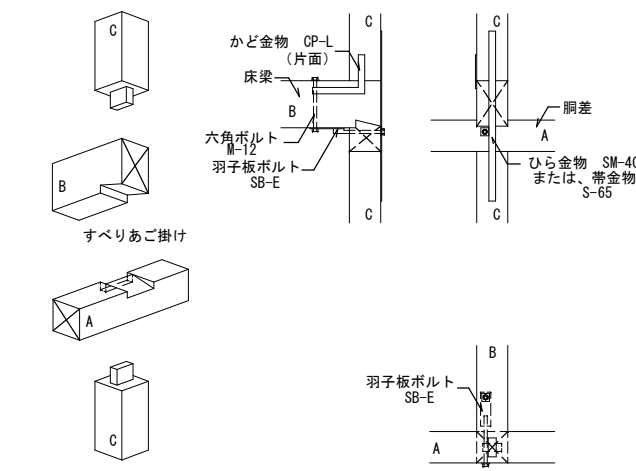
### ③ 胴差と直交する床梁が胴差の下側にある場合

床梁(B)は下階管柱の長ほぞに差し込み、かど金物(CP-L)を片面に当て、太めくぎ(ZN65)で打ち、胴差(A)は床梁(B)に渡りあり掛け、床梁(B)を羽子板ボルト(SB-E)で引き寄せ、上階柱は胴差(A)に短ほぞ差し、上下管柱相互は外側にひら金物(SM-40)(長さが足りない場合は、帯金物(S-65)を代用する)を当て、各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。床梁(B)と下階柱とは、かど金物(CP-L)を片面に当て、太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



### ④ 胴差と直交する床梁が胴差の上側にある場合

下階管柱の短ほぞに胴差(A)を差し込み、床梁(B)は胴差(A)にすべりあり掛けとし、胴差より羽子板ボルト(SB-E)で引き寄せ、上階管柱は床梁(B)へ短ほぞ差しとし、上下管柱相互は外側にひら金物(SM-40)(長さが足りない場合は、帯金物(S-65)を代用する)を当て、各々太めくぎ(ZN65)で打ち固める。上階管柱と床梁(B)とはかど金物(CP-L)を片面に当て、太めくぎ(ZN65)で打ち固める。



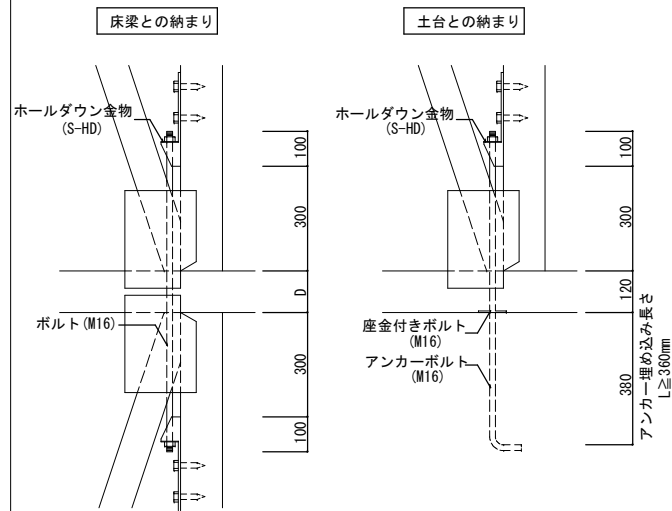
## 5 ホールダウン金物周辺の納まり

### (1) 筋違いとホールダウン金物の納まり

筋違いとホールダウン金物は極力重ならないように位置を決定する。重なりが出てきた場合には、以下の方法を参考に納まりを決定する。

#### (a) ホールダウン金物自体と筋違いの重なり

ホールダウン金物と横架材間の総め代を長く取り、筋違いと重ならないようにする。その場合、座金付きボルト(土台)やアンカーボルト(基礎)、ボルト(床梁等)が標準の場合より長くなることに注意する。

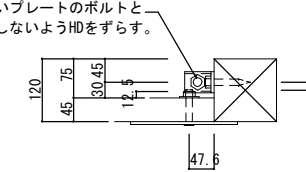


・梁成によるボルト長さ (mm)		・ボルト長さ (mm)	
筋違いが上下の一方にある時	筋違いが上下にある時	座金付きボルト	アンカーボルト
D+430	D+800	520	900

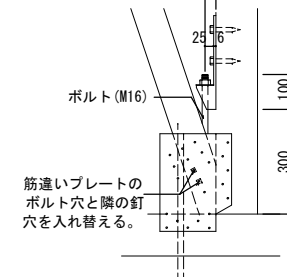
### (b) ホールダウン金物の引寄せボルトと筋違いプレートの角根平頭ボルトのナット部分との重なり

120mm×120mmの柱に対して45mm×105mmの筋違いが取り付け場合ホールダウン金物の引寄せボルトと筋違いプレートの角根平頭ボルトのナット部分との重なりを防ぐため以下のように納める。ただし、120mm角未満の場合は施工できないことに注意する。

① ホールダウンをずらす  
筋違いプレートのボルトと干渉しないようHDをずらす。  
筋違いプレートの角根平頭ボルトのナットが入るように、柱芯から筋違いと反対側に15mmずらす。

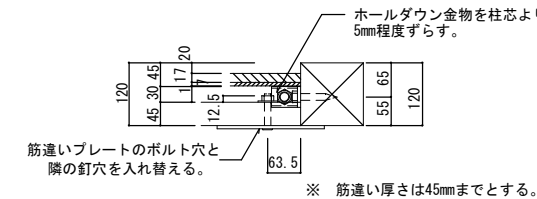


② 改良した筋違いプレートを使用する  
筋違いプレート(BP-2)の角根平頭ボルト用穴と隣の釘穴位置を入れ換えたもので、構造性能に関わる基本的な仕様が変わらないプレートを作成し使用する。



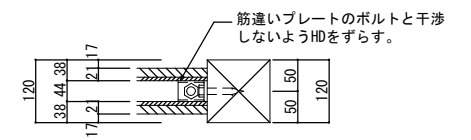
### (c) 折衷壁(壁の片側が真壁)におけるホールダウン金物の納まり

折衷壁(壁の片側が真壁)の場合、柱芯から筋違い側に5mmずらし、かつ上記(b)-②のように改良した筋違いプレートを使用する。ただし、筋違い厚さは45mm以下となるようにする。



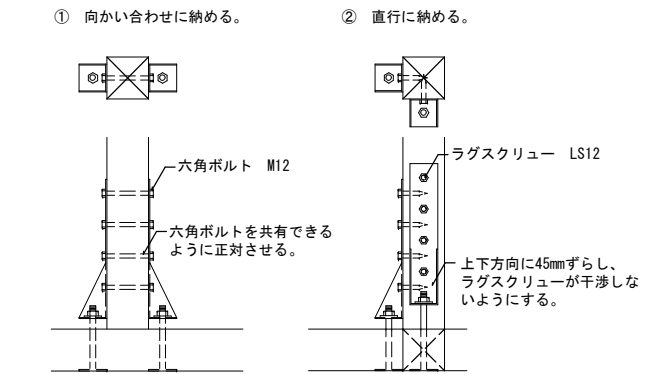
### (2) 両側真壁の場合のホールダウン金物の納まり

両側真壁の場合、ホールダウン金物をS-HDとし、また柱のちりを16mm程度にする。ただし、この場合筋違いは設けられない。



### (3) 2本のホールダウン金物の納まり

① 向かい合わせに設ける場合、六角ボルトを共有できるようにする。  
② 直交する場合、ホールダウンの取り付け位置を上下に45mmずらし六角ボルトが重ならないようにする。この場合欠損が大きいのでラグスクリューを使用することが望ましい。

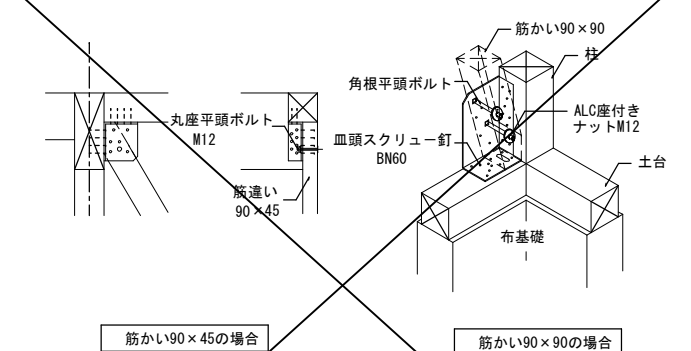


### (4) ホールダウンの選定

ホールダウン	ホールダウンのとりつく壁の種類		
	大壁 ※	折衷壁	両面真壁
HD-N	○	×	×
HD-B	○	×	×
S-HD	○	○	○

記号  
○: 使用できる。  
×: 納まらないため、使用できない。  
※ 面材の受材・筋違い等が干渉する場合はS-HDを使用する。

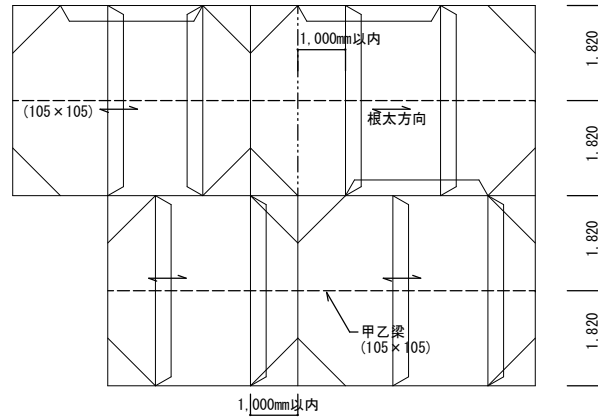
### (5) 3階建て用筋違い金物



# 木造在来軸組工法標準図 (3)

## 6 床 (面材) 取付

耐力壁線の交点が不一致の場合は、その階の水平力伝達に有効な横架材を耐力壁線上に設ける。ただし、1メートル (約半間) を限度とする。



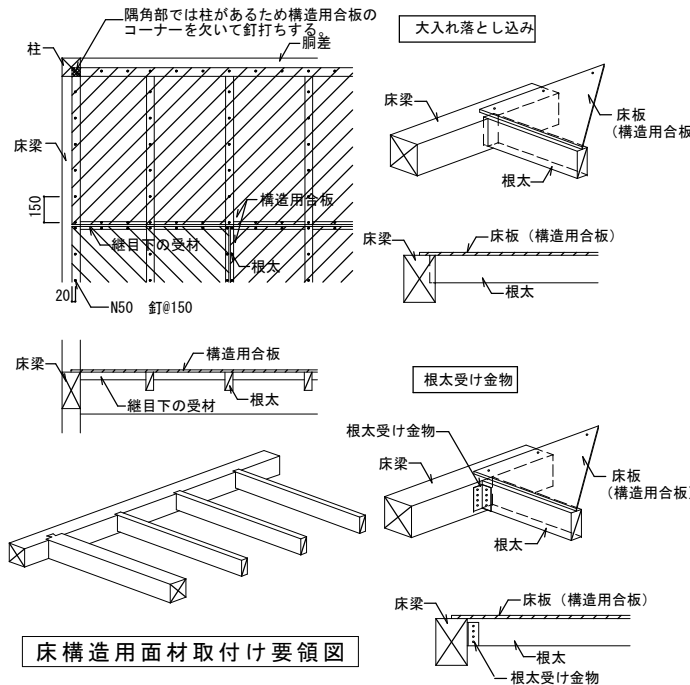
### 採用床構造用面材取付け要領

#### (1) 水平構面の剛性が十分期待できる床の施工 (剛な床組)

- 種類：サイズ3×6版以上、厚さ24mmの構造用合板を用いる。
- 張り方：構造用合板の長手方向を根太と直交させ、かつ千鳥張りとする。構造用合板の継手は、根太上で突き付け継ぎとし、継目下に受材 (45mm×45mm程度) を設ける。
- 釘打ち：構造用合板の四周边は釘 (N75) を150mm以下で根太または床梁や脚差、受材等に平打ちする。
- 床根太の寸法は45mm×105mmを標準とし、根太間隔は、455mm以下とする。ただし、断面寸法105mm×105mm以上の甲乙梁を1.820mm内外 (1間) の間隔に梁間・桁行き方向に配置する。
- 床梁、脚差の仕口補強  
柱と床梁・脚差、床梁と脚差の仕口は、金物、ボルトにより十分緊結補強する。

#### (a) 根太と床梁、脚差の上端高さが同じ場合の施工方法

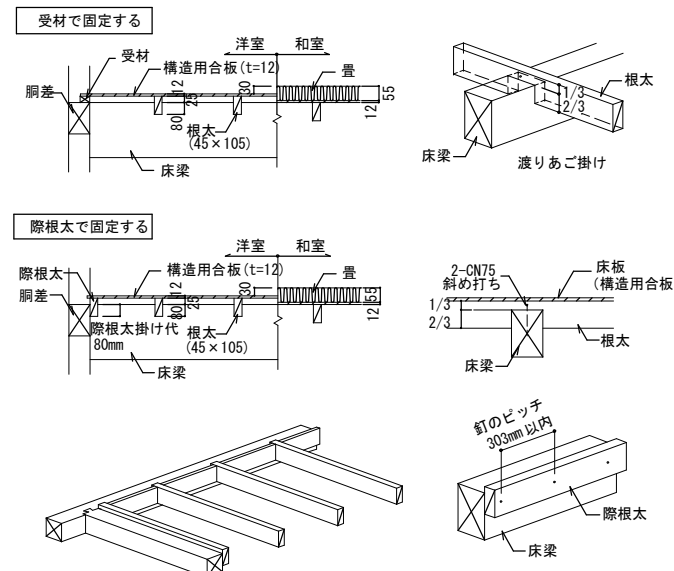
根太は床梁、脚差に大入れ落とし込みとし、釘 (N75, 2本) で斜め打ちとするか、または、根太受け金物を用いて床梁、脚差に留め付ける。この場合、構造用合板を床梁、脚差に釘で直張りする。ただし、隅角部では柱があるため構造用合板のコーナーを欠いて釘打ちする。なお、この場合、火打梁は省略できる。



### 床構造用面材取付け要領図

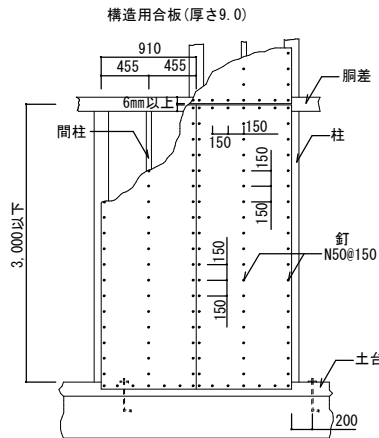
#### (b) 根太と床梁、脚差の上端高さが異なる場合の施工方法

床梁、脚差に直交する根太は渡りあご掛けとし、釘 (N75, 2本) で斜め打ちとする。また、床梁・脚差の際には脚差根太、または受材を添え付け床板構造用合板の四周边を固定する。脚差根太は床梁・脚差へ釘打ち (N90) 間隔303mmで平打ちする。



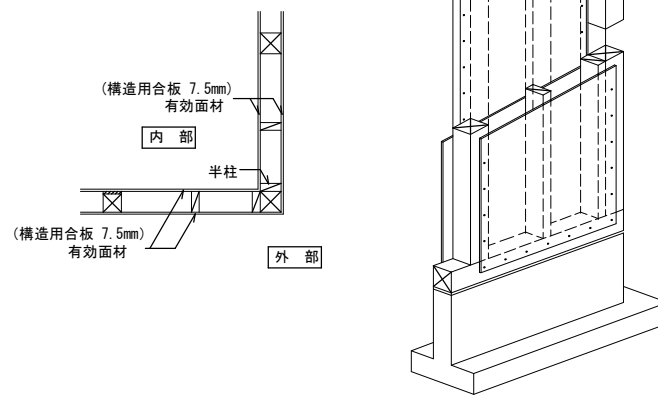
## 7 耐力壁 (面材) 施工例

### (1) 釘打ち基準

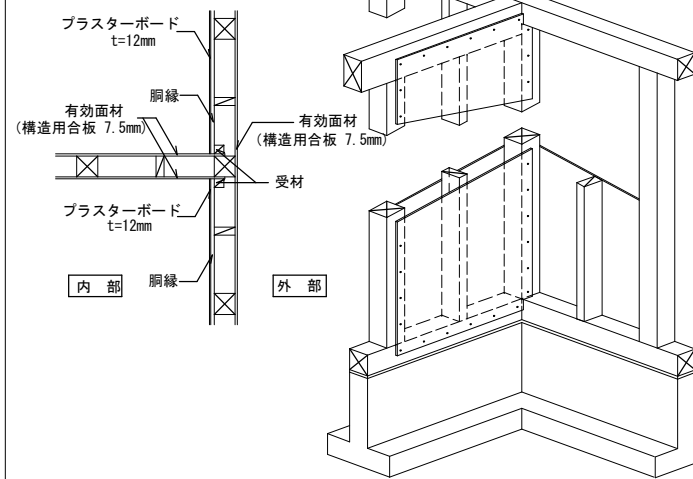


### (2) 標準的な耐力壁 (面材) の納まり

(a) 隅角部 (屋外・室内側とも構造用合板 7.5mmの場合) 内部側の入隅に有効面材を貼るために、柱面に半柱を釘N75 @300で取付ける。



### (b) T字部 (外壁屋外側・内壁に構造用合板7.5mmの場合)



### (c) 柱の断面寸法が異なる場合の面材の納め方

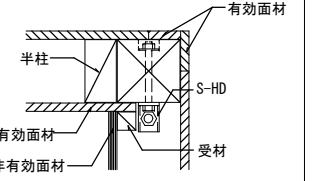
- 柱を外面に合わせる。内壁側は受材で調整し、面材を張る。
- 柱を外面に合わせる。内壁側は柱の一部を欠き取り調整し、面材を張る。
- 柱は芯合わせとし、外壁側、内壁側とも受材で調整し、面材を張る。
- 柱は芯合わせとし、外壁側、内壁側とも柱の一部を欠き取り調整し、面材を張る。

### (3) 柱にホールダウン金物を使用する場合の耐力壁 (面材) の納まり

#### (a) 隅角部

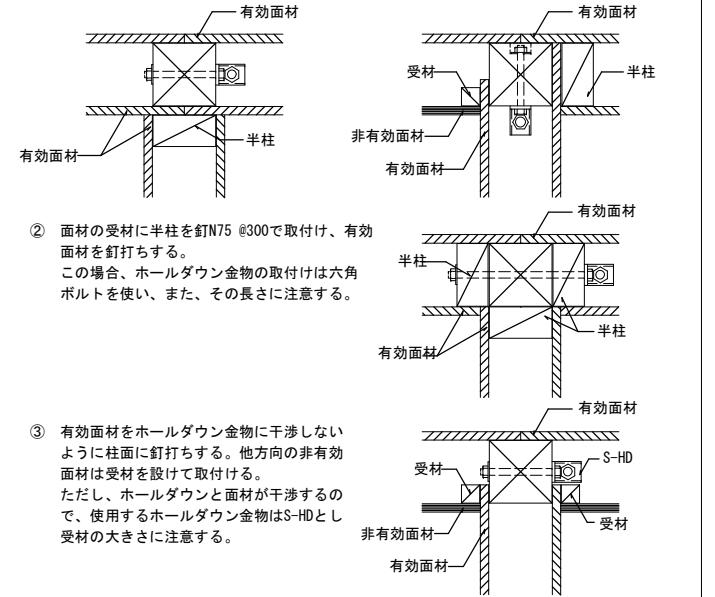
- ホールダウン金物の取り付け柱面と直交する柱面に有効面材を伸ばし、釘打ちする。その上から半柱を釘N75 @300で取付け、その半柱に他方向の面材を釘打ちする。
- ホールダウン金物の取り付け柱面と直交する柱面に有効面材を伸ばし、釘打ちする。他方向の非有効面材は受材を設けて取付ける。
- 面材の受材に半柱を釘N75 @300で取付け、その半柱に有効面材を釘打ちする。この場合、ホールダウン金物の取付けは、六角ボルトを使い、また、その長さに注意する。  
半柱を挟む場合、六角ボルトを用いる。(長さに注意すること)

- 面材の受材に半柱を釘N75 @300で取付け、その半柱に有効面材を釘打ちする。他方向の非有効面材は受材を設けて取付ける。ただし、ホールダウンと面材が干渉するので、使用するホールダウン金物はS-HDとし、受材の大きさに注意する。



#### (b) T字部周辺

- ホールダウン金物の取付柱面と直交する柱面に面材を伸ばし釘打ちする。その上から半柱を釘N75 @300で取付け、その半柱に他方向の有効面材を釘打ちする。



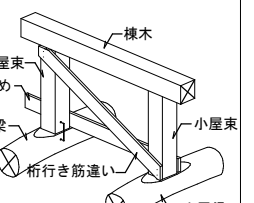
## 8 小屋組

### (1) 小屋火打梁

火打梁は耐力壁線に囲まれた隅角部に設ける。

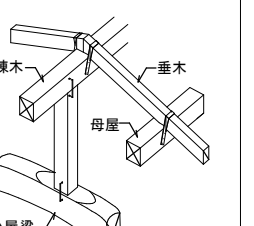
### (2) 小屋筋違いや桁筋違いの振れ止め

小屋組の一体化を図るために、小屋束相互及び梁・桁にまたがり筋違いや15mm×90mm以上を釘 (N50, 2本) で平打ちし小屋束固定する。梁間方向、桁行方向共くも筋違いは4m以内に設置する。



### (3) 垂木

軒先部や、けらば・棟部の垂木は軒折・母屋・棟木等の受材とひねり金物 (ST)・折曲げ金物 (SF)・くら金物 (SS) 等で緊結する。

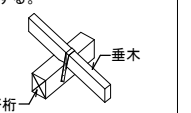


### (4) 棟木・母屋

棟木と第2母屋は、必要に応じて金物等で小屋束に接合する。

### (5) 小屋束

小屋束下部と小屋束あるいは妻梁・桁は、必要に応じて金物等で接合する。



# 特記仕様書（テコットパイルSR工法）

## 1. 工法概要

本工法は、鋼管の先端部分に半円形の拡翼および三角形の鉛直掘削刃を取り付けた杭を回転貫入させこれを杭として利用する技術である。  
打設後に重錘を杭に落下打撃することにより、先端地盤の支持力を確認するものである。

工法の手順は、下記の通りである

- 杭の建て込み：杭を吊り込んで杭芯に合わせ、杭をセットする。
- 回転埋設：杭を正回転（右回転）させ拡翼の推進力と、必要に応じ圧入力を加えて杭を貫入させる。
- 継手作業：1本目を回転貫入したら、2本目以降は溶接による継ぎ足しを行い、順次回転貫入させる。
- 埋設完了：所定深度まで回転埋設が終了したら、モーターを逆回転（左回転）させキャップを外して貫入を完了する。
- 杭打撃（支持地盤の確認）：杭に重錘落下による打撃力加え支持力の増加をはかる。打撃力の目安は、杭の短期許容値以内としスライドウエイト計測による管理値に従う。（試験杭、および本杭で規定の管理トルク値以下の場合）

## 2. 一般事項

- 本工法は、本特記仕様書による。
- 杭仕様は、下表による。

### 杭仕様

杭径D(mm)	杭本体部肉厚 t(mm)	拡翼径(Dw)(mm)	下杭長(m)	杭本数(本)	設計杭耐力「長期」(kN/本)	設計杭耐力「短期」(kN/本)
φ101.6	3.5	300	2.50~3.50	14	55.12	110.24

- 本施工に先立ち、試験杭（通常1本）を行う。
- 上記によるほかは、施工計画書による。

## 3. 施工業者

本工法の施工は、先端羽根付き鋼管杭（テコットパイルSR工法）指定施工会社が行う。【伊田テクノス㈱TEL048-720-4888】

## 4. 施工計画書

本工事に先立ち、施工計画書を作成し、これに基づき工事を実施する。計画書は、次の内容を記載する。

- ① 工事概要
- ② 施工管理組織図
- ③ 工程表
- ④ 施工概要、施工順序
- ⑤ 施工管理項目
- ⑥ 施工機械・器具仕様

## 5. 試験杭

試験杭は、本杭の施工に先立ち、次の事項について確認する。

- (1) 杭設置地盤の状況
- (2) 杭回転埋設状況と土質柱状図との整合性
- (3) 支持層の確認（埋設時の回転トルクの変化、貫入量の変化）
- (4) 設計支持力の確認（スライドウエイト試験）

※試験杭に採用した杭が、設計条件を満足する場合は、これを本杭とする。

## 6. 本杭における支持層の確認

支持層の確認は、次の方法に基づいて行う。

- (1) 標準貫入試験調査結果に基づき確認する。
- (2) 杭回転駆動装置モータの油圧値、電流値（管理トルク値）により確認する。（試験杭のデータ以上）

※回転トルクが杭軸部の短期許容ねじれ強さを超えないように管理を行う

※もし、トルク管理値未満の場合は、1回転あたりの貫入量が5mm以下（貫入量管理基準値）を確認した後、

スライドウエイト試験による支持力確認を行う。

## 7. 施工機械

施工機械本体は、先端翼部、施工長、施工条件の広さ・形状、搬入路などの条件を考慮し決定する。施工機械は、クローラ-型機、ラフター型機、建柱車タイプ、バックホータイプが使用可能である。

## 8. 継手の接続

継手の接続は、アーク溶接によって行う。

鋼管の継手溶接は、日本溶接協会規格WES7601「基礎杭設時における溶接作業標準基準」による。

開先部は、ワイヤーブラシ等で汚れを除去し、裏当リングを使用して電気溶接による全周溶接を行う。

杭継手部の形状は、鋼管杭協会の規格に準じたものとする。

溶接工は、JISZ3801（手動溶接技術検定における試験方法及び判定基準）およびJIS3841（半自動溶接技術検定における試験方法及び判定基準）に定められた試験に合格した者、又は労働安全衛生法アーク溶接の特別教育を修了し、継続してくいの溶接作業に従事しているものとする。

## 9. 施工精度

- (1) 杭頭のズレは、±100mm以内かつ基礎幅以内とする。
- (2) 杭が高止まりした場合は、監督員に報告し、設計管理者と協議の上処置を決める。（この時、「支持層の根入れの確認」や「支持地盤の不陸」等を考慮し、処置を決めるものとする。）
- (3) 杭の高止まりに関しても設計管理者との協議により健全性を決めるものとする。

## 10. 施工記録及び施工報告書

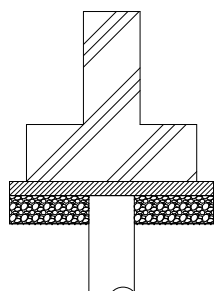
施工記録は、杭施工にあたり各杭の施工状況を記録し杭の施工終了後に施工報告書を作成し提出する。

- ① 工事件名
- ② 工事場所
- ③ 施工年月日
- ④ 施工機械
- ⑤ 杭番号
- ⑥ 杭規格・数量
- ⑦ 杭設置深さ
- ⑧ 回転終了時のトルク値
- ⑨ その他必要事項

## 11. 杭頭処理

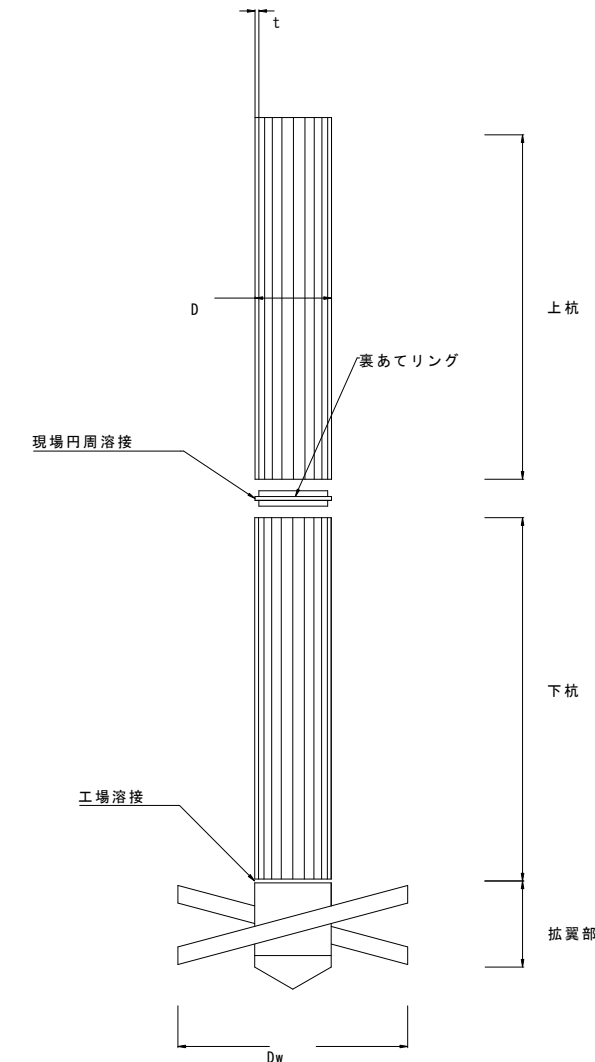
杭頭処理方法および形状は、認定の範囲に含まれない為、各設計士の判断によるものとする。

直接基礎と杭状地盤補強工法との接合部の一例を下記に示す。



砕石が介在しない場合

## 杭長リスト

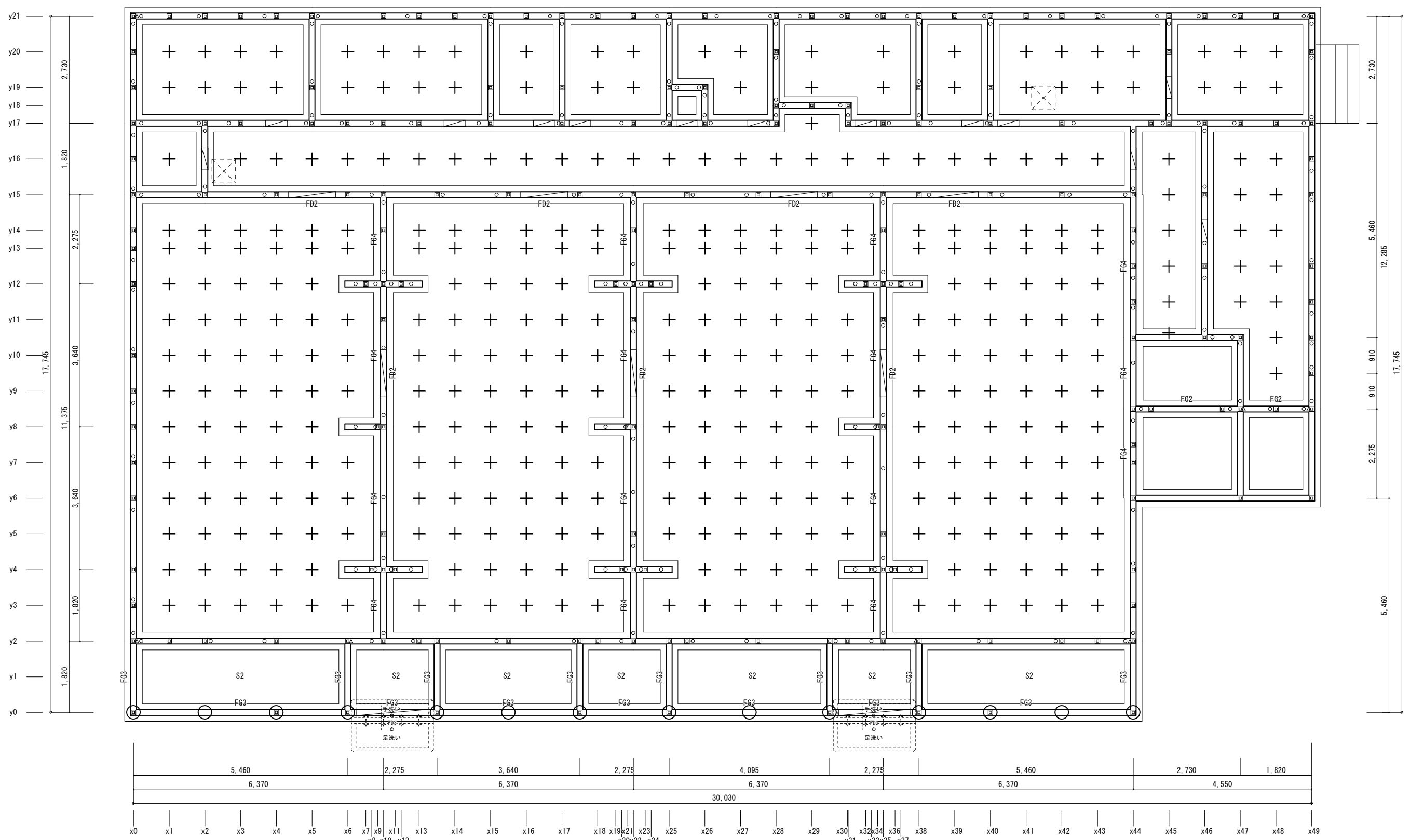


D	上杭		下杭		Dw
101.6mm	STK490	t=3.5mm	STK490	t=3.5mm	300mm

工法の名称：テコットパイルSR工法

一先端翼付き鋼管を用いた杭状地盤補強工法－（改定3）

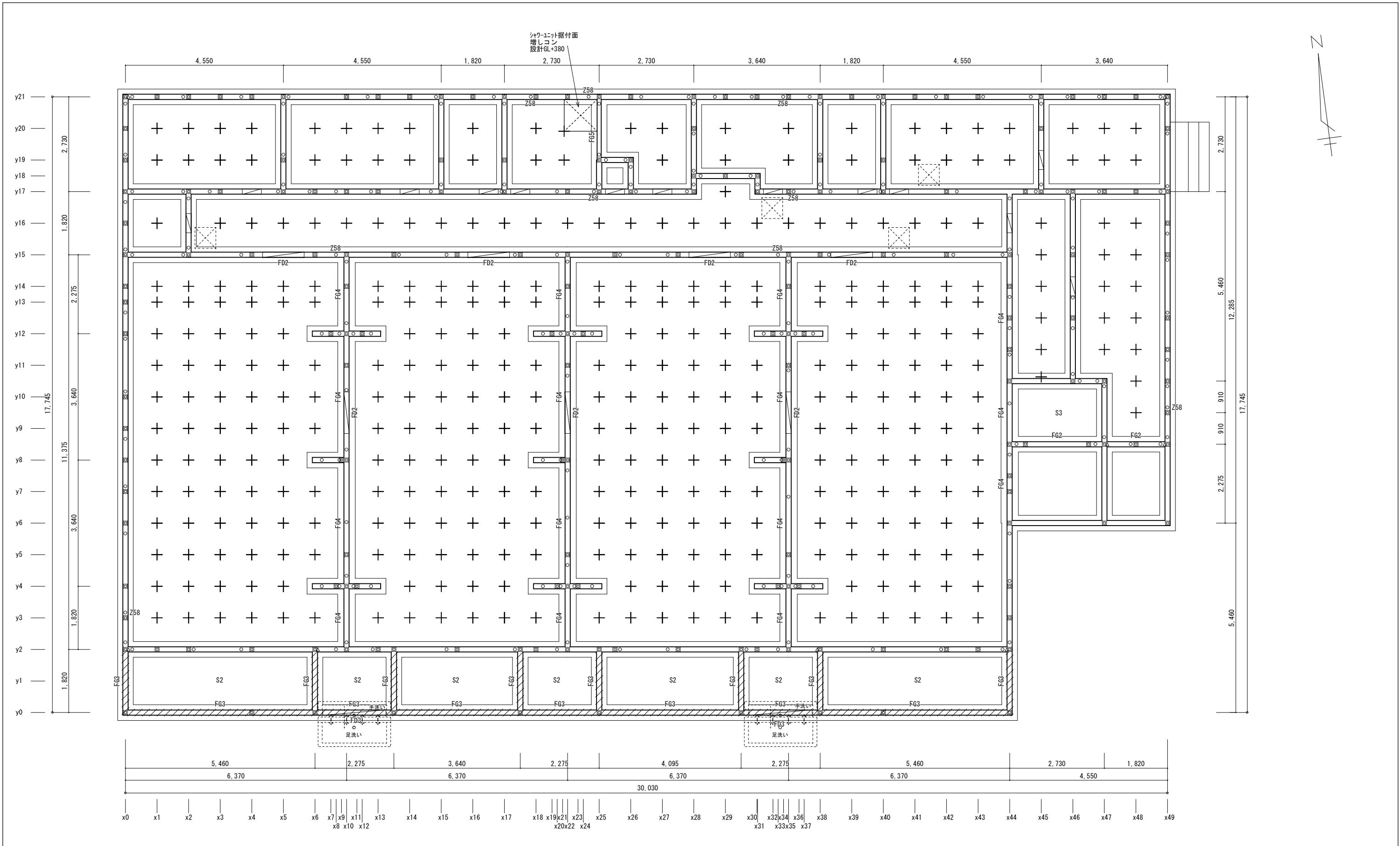
GRBC 性能証明 第10-08号 改3



地耐力  
 地盤の長期許容応力度  $q_a = 30.0 \text{ kN/m}^2$

テコットパイルSR工法  
 GBRC 性能証明 第10-08号 改3  
 ○ テコットパイル  
 軸部材径  $\phi 101.6\text{mm}$ , 肉厚  $t=3.5\text{mm}$ , STK490  
 根入れ=設計GL-290  
 先端翼径  $D_w=300\text{mm}$   
 杭長  $L=2.50\sim 3.50\text{m}$   
 本数  $n=14$ 本  
 設計地耐力  $50\text{kN/m}^2$

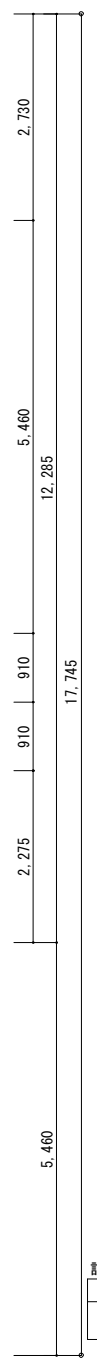
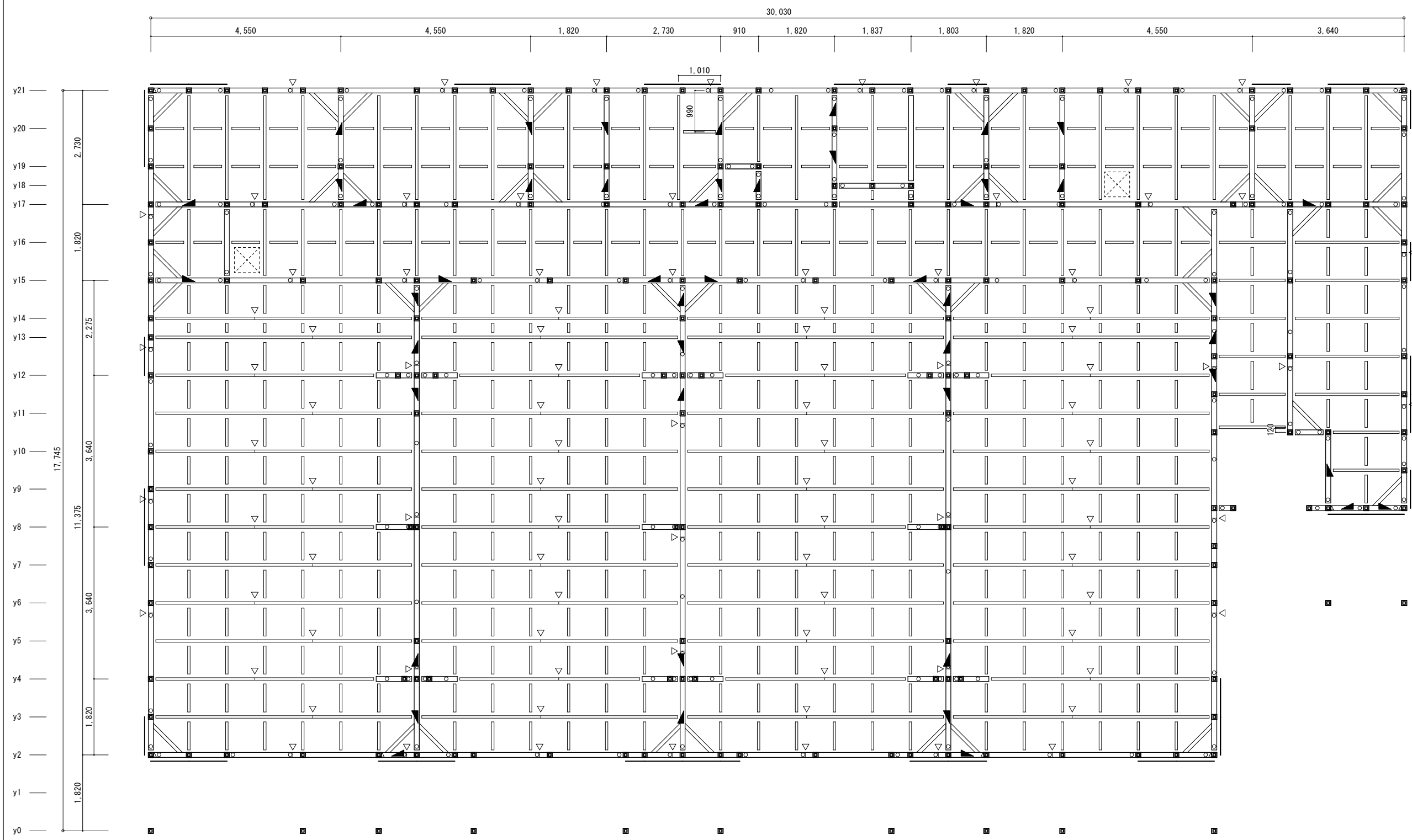
小川学童保育室新築工事	設計図	区分	名称	縮尺	株式会社 丸岡設計	所長	主査	設計	日附	NO. S-09
			テコットパイル伏図	S=1/50 (A1出図) S=1/100 (A3出図)	一級建築士 登録第107399号 二宮和夫					



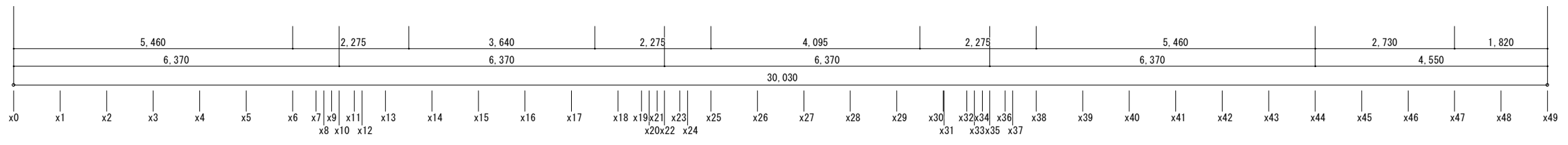
シャワーユニット据付面  
増しコン  
設計GL+380



凡例		スラブ (土間)		アンカーボルト座金仕様	
	基礎梁 (外側の線は底盤) FG2: 基礎梁の断面記号 (記号の無い基礎梁はFG1)		S2: 土間の断面記号 (記号の無い箇所はS1)	アンカーボルト座金仕様 無印: スクリュー座金<ザボレス> Z58: オメガ丸座金58	
	人通り・開口部 FD2: 断面記号 (記号の無い箇所はFD1)		M12アンカーボルト		M16アンカーボルト
	床下点検口		床束		管柱



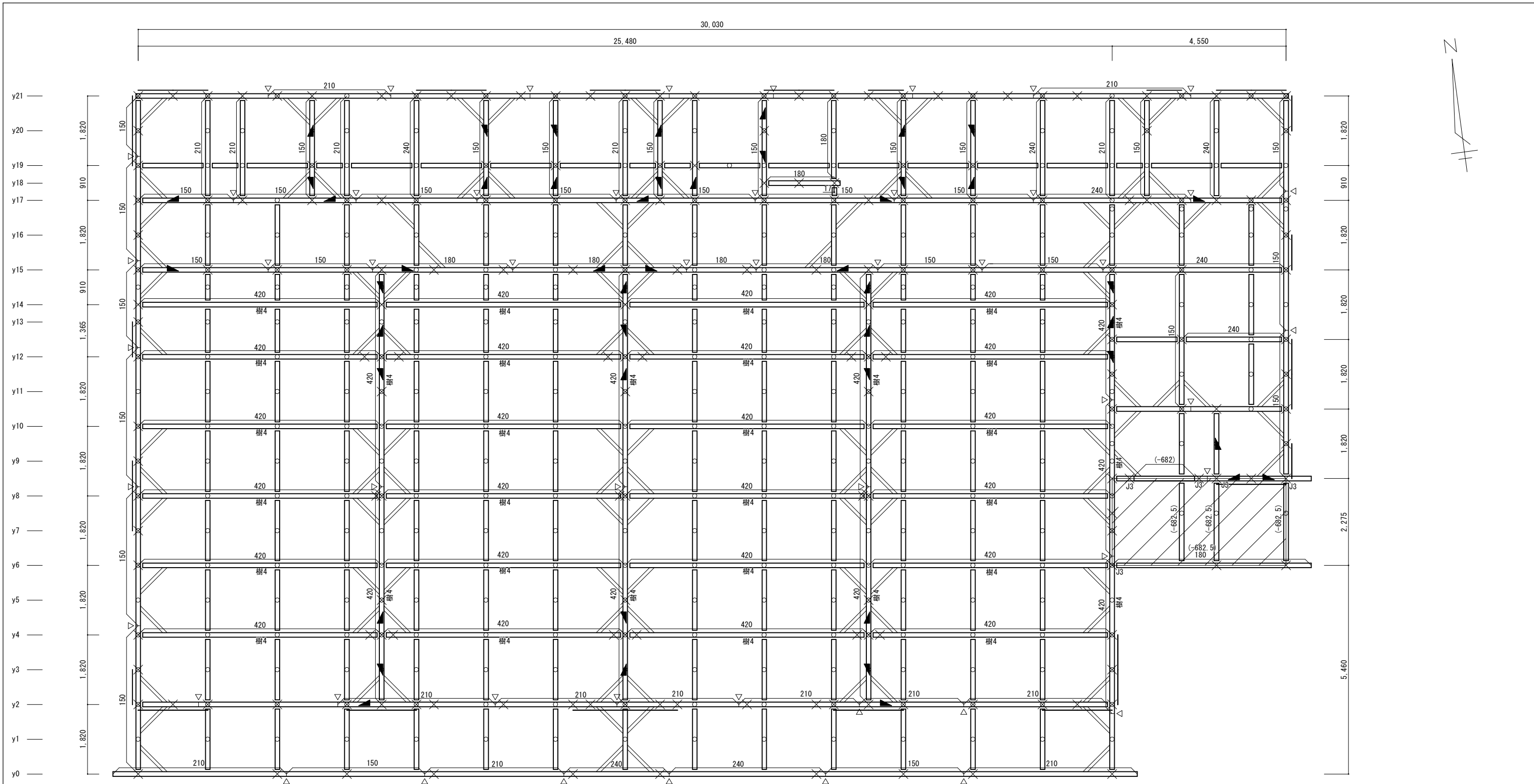
記号と仕様の対応		
分類	記号	仕様
樹種	樹2	ひのき 機械等級製材 E90



凡例

	土台 (120×120 樹2)
	大引 (90×90 樹2)
	床下点検口
	火打土台
	管柱
	継手
	筋かいダブル
	筋かいシングル
	面材耐力壁

※防蟻処理 構造耐力上主要な部分でGL+1000以内の部分  
 ※ネダレス工法 構造用合板t=24  
 (長尺塩ビシート貼部分は、構造用合板t=12の上、合板t=12貼)

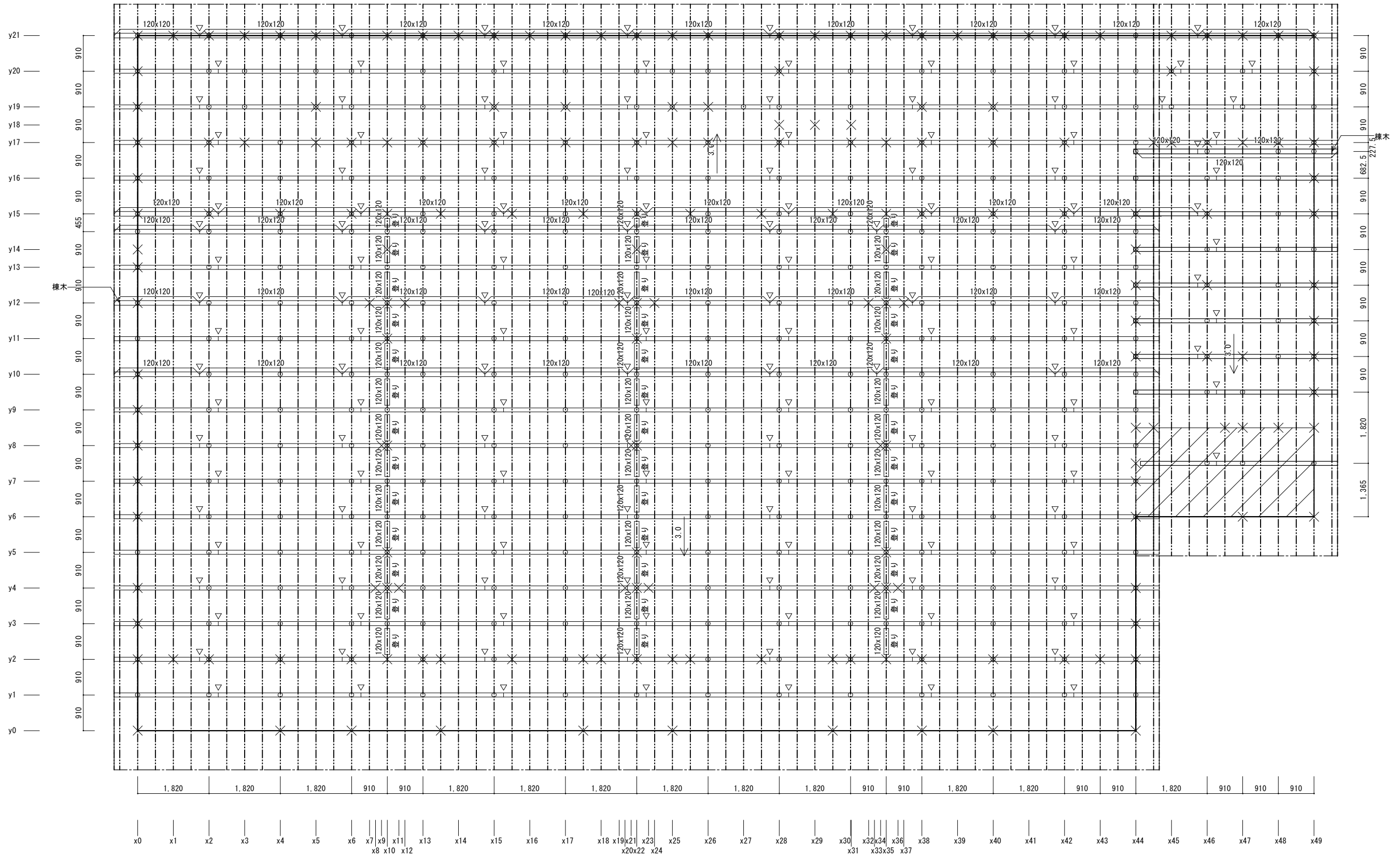


1,820 1,820 1,820 910 910 1,820 1,820 1,820 1,820 1,820 1,820 910 910 1,820 1,820 910 910 1,820 910 910 910

x0 x1 x2 x3 x4 x5 x6 x7 x8 x9 x10 x11 x12 x13 x14 x15 x16 x17 x18 x19 x20 x21 x22 x23 x24 x25 x26 x27 x28 x29 x30 x31 x32 x33 x34 x35 x36 x37 x38 x39 x40 x41 x42 x43 x44 x45 x46 x47 x48 x49

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70
	樹4	べいまつ 対称異等級構成材 E105-F300
横架材 接合部	J1	大入れ榫掛け+羽子板ボルト
	T1	腰掛け鎌+短さく金物
	J3	(通し柱)大入れほぞ差し+羽子板ボルト

- 凡例
- (-200) 梁・桁(寸法、樹種番号 寸法は幅120のものについては梁せいのみ表示)
  - 150 ※幅120×梁せい120なら省略、括弧付きの数値は地廻りを基準とした配置高さ
  - 樹4
  - 母屋下がり
  - 火打金物
  - 継手
  - 小屋束
  - 下階柱
  - 筋かいダブル
  - 筋かいシングル
  - 面材耐力壁
- ※接合部記号表記の無い仕口の仕様はJ1、継手の仕様はT1  
 ※樹種番号表記の無い横架材の樹種は樹1



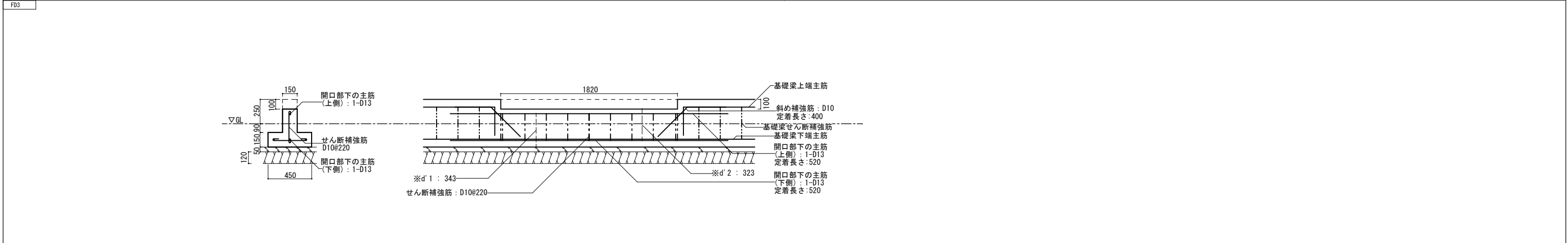
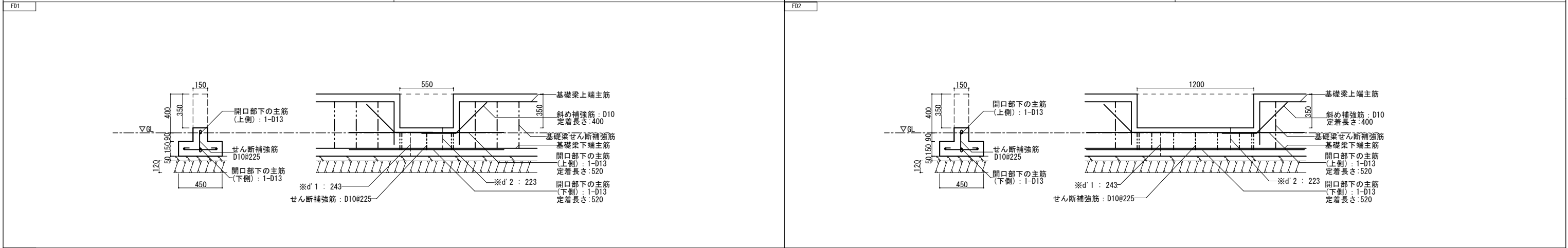
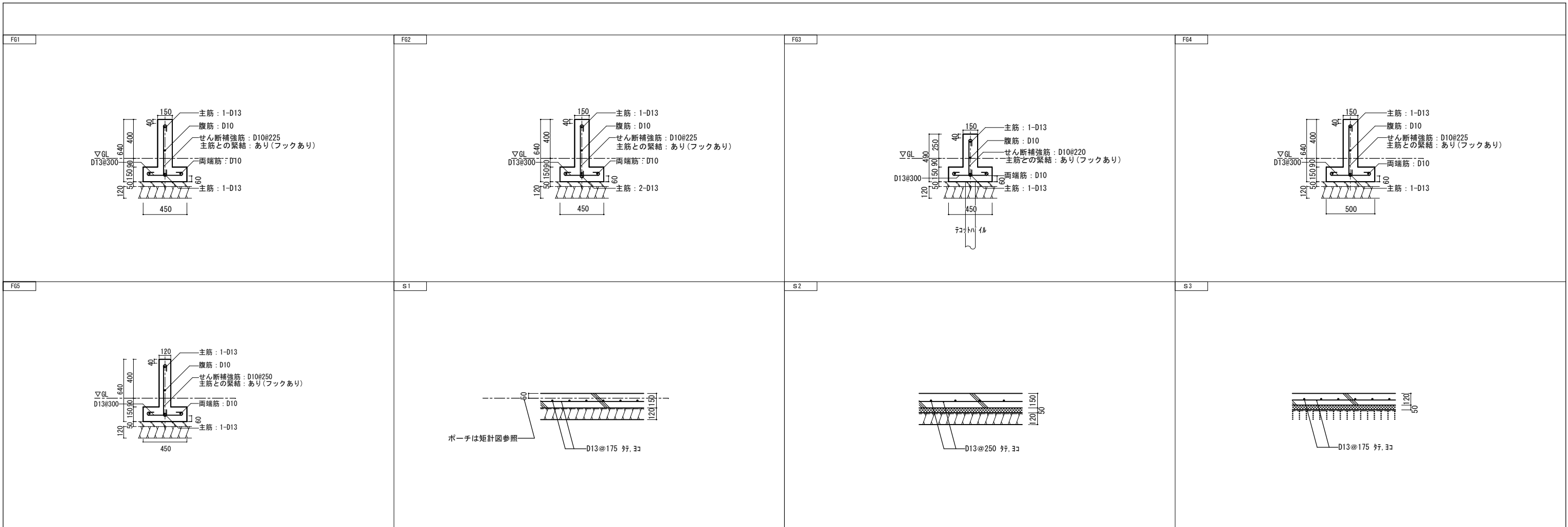
記号と仕様対応

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70
樹種	樹3	すぎ 無等級製材
横架材	T1	腰掛け鎌+短ざく金物
接合部	J1	大入れ鎌掛け+羽子板ボルト

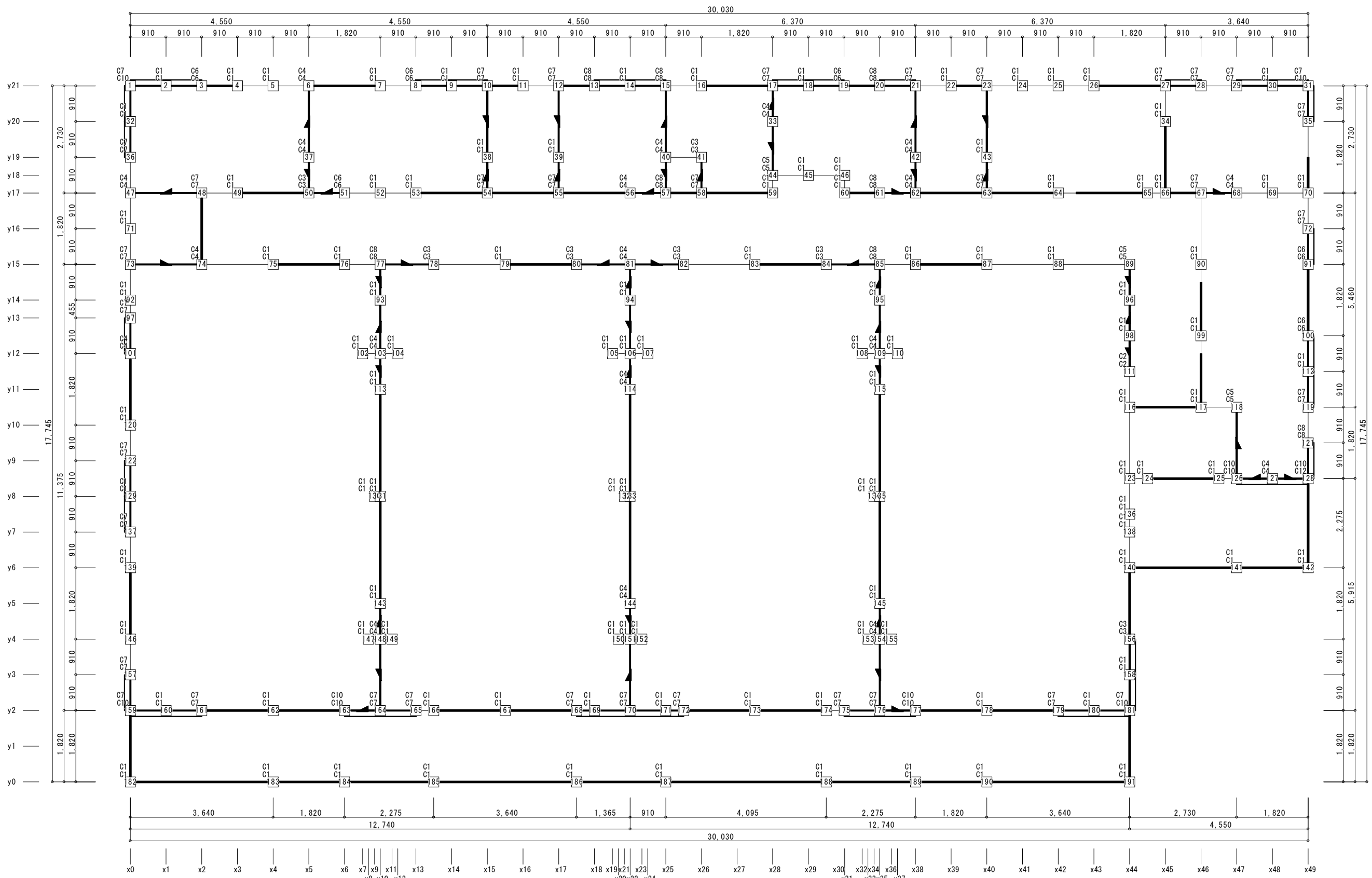
凡例

105	棟木/母屋(寸法、樹種番号 寸法は幅105のものについては梁せいのみ表示)
樹1	※幅105×梁せい105なら省略
	母屋下がり
	垂木(45×75 樹3)
○	小屋束
×	下階柱

※接合部記号表記の無い仕口の仕様はJ1、継手の仕様はT1  
 ※樹種番号表記の無い横架材の樹種は樹1



※d' 1 : [開口部下の主筋(上側)の中心]と[基礎下端]の距離 ※d' 2 : [開口部下の主筋(下側)の中心]と[開口部下端]の距離



記号と仕様の対応

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70

凡例

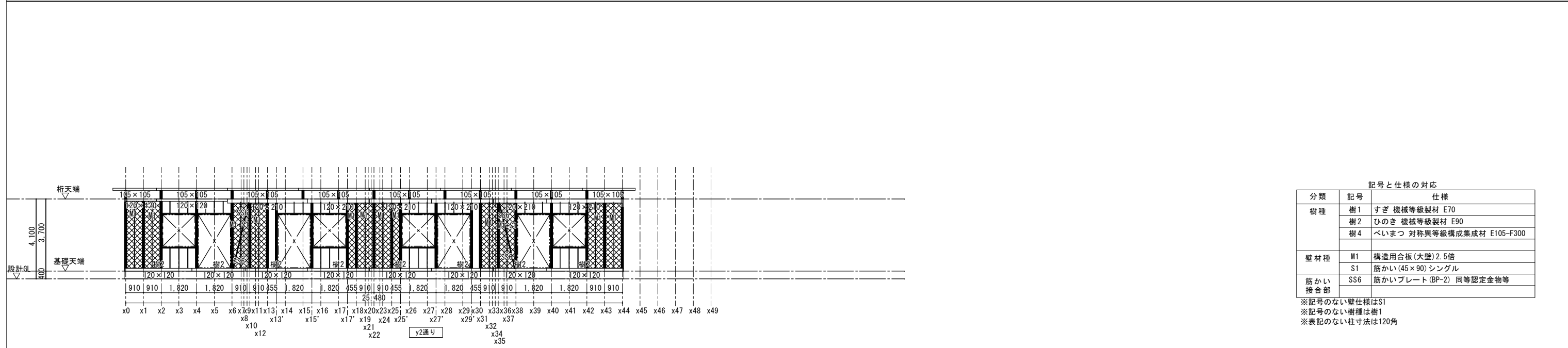
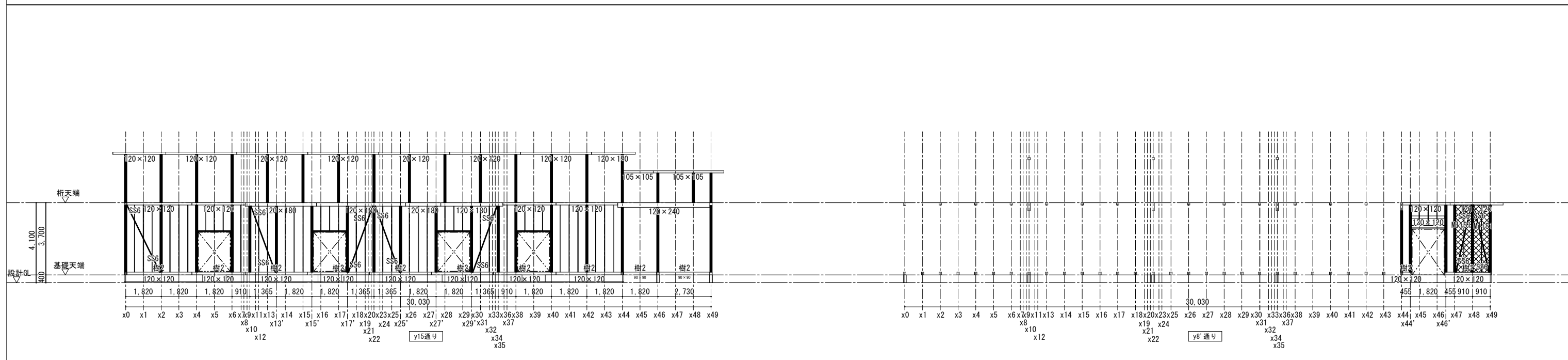
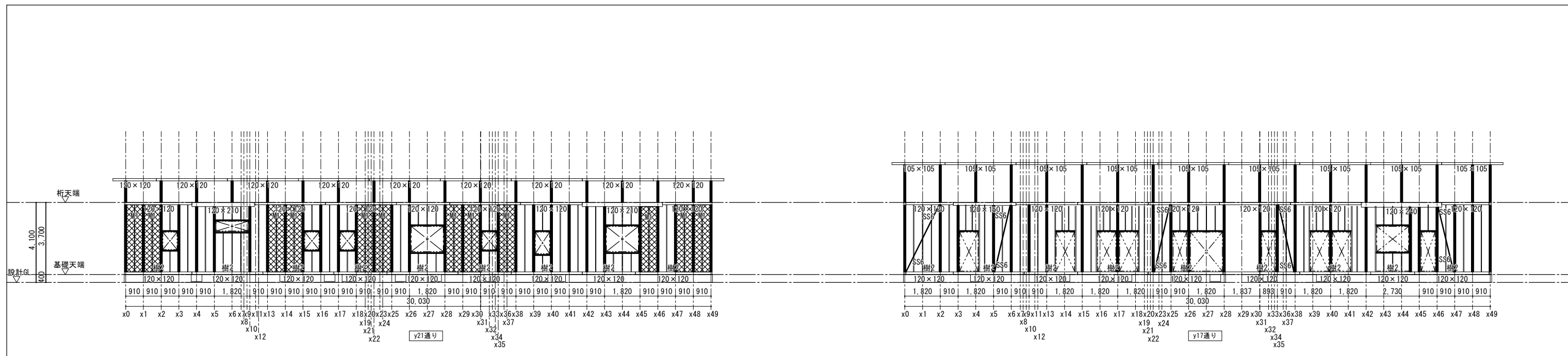
- 一般壁
- 開口部
- 面材耐力壁
- ▲ 筋かいダブル
- ▲ 筋かいシングル
- 記号上: 柱頭金物を示す
- 記号下: 柱脚金物を示す
- 159 ← 数字: 柱番号を示す

記号と仕様の対応

分類	記号	仕様	耐力 (kN)
柱頭柱脚 接合部	C1	短ほぞ差し	0.00
	C2	かすがい打ち	1.08
	C3	長ほぞ差し込み釘打ち	3.81
	C4	L字型のかど金物 釘CN65×10本	3.38
	C5	T字型のかど金物 釘CN65×10本	5.07
	C6	山形プレート金物 釘CN90×8本	5.88
	C7	羽子板ボルトφ12mm又は短ざく金物	7.50
	C8	羽子板ボルトφ12mm又は短ざく金物+スクリュー釘×1本	8.50
	C10	引き寄せ金物φ12mmのボルト×3本	15.00
	C12	引き寄せ金物φ12mmのボルト×5本	25.00

※上記耐力と同等以上の金物も使用可能

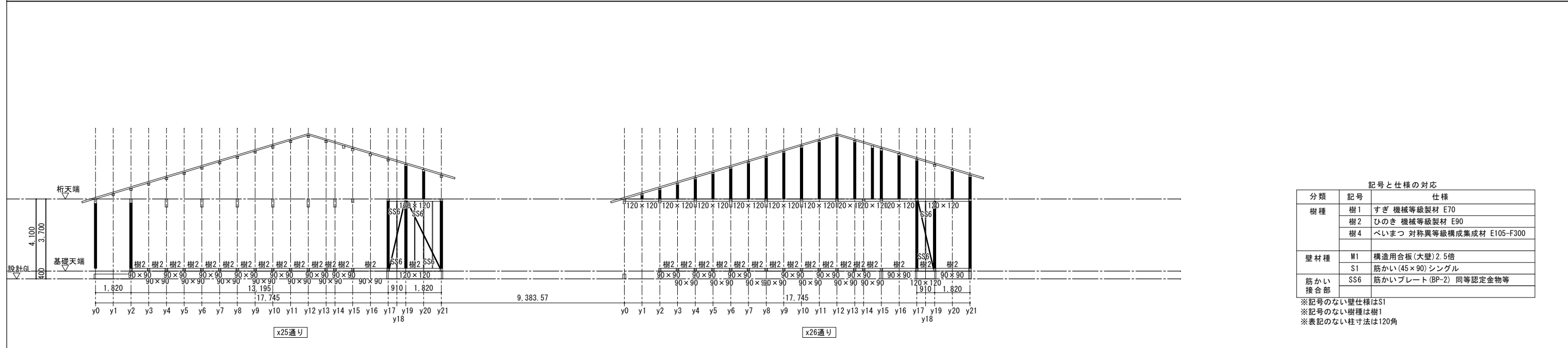
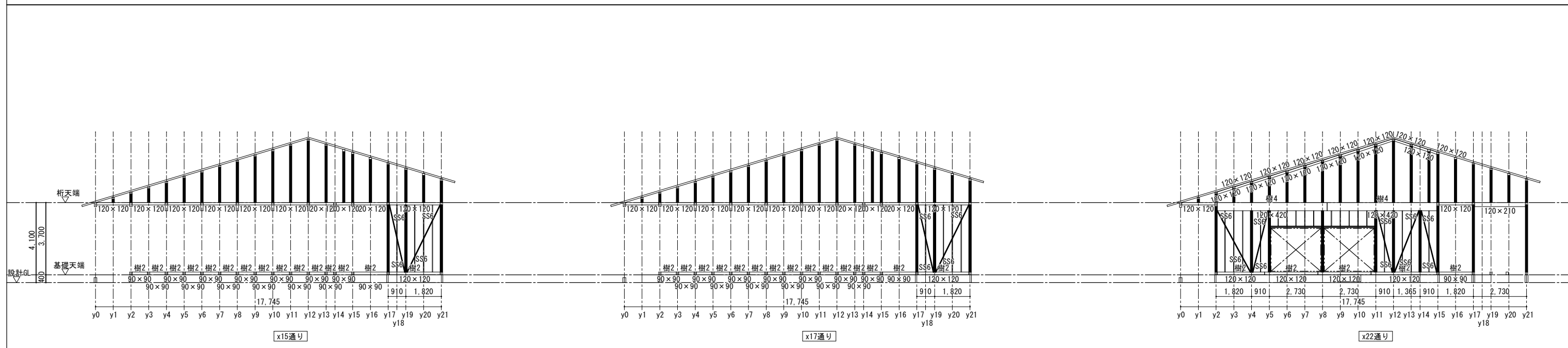
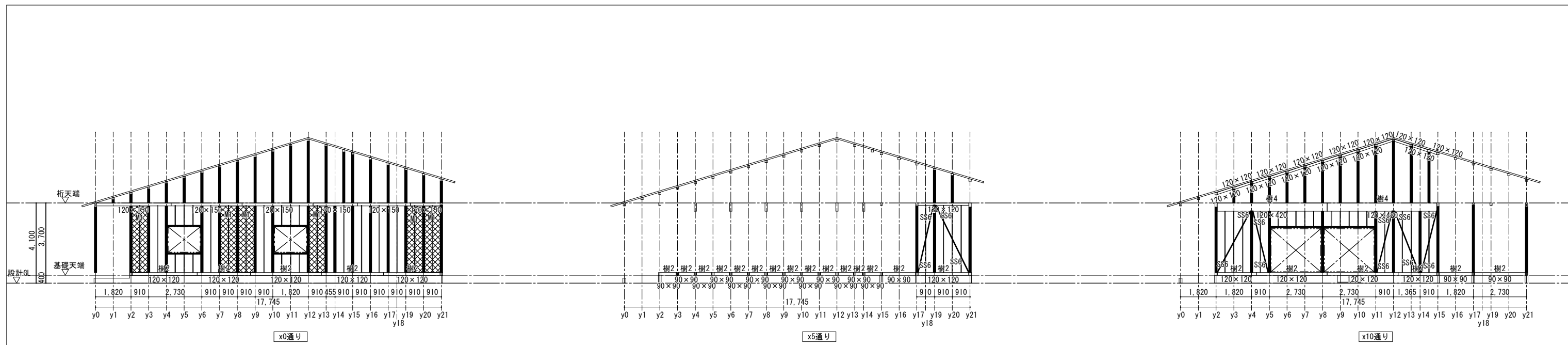
※部材断面、材料強度の変更に関しては、安全側への変更を許容する



記号と仕様の対応

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70
	樹2	ひのき 機械等級製材 E90
	樹4	べいまつ 対称異等級構成集成材 E105-F300
壁材種	M1	構造用合板(大壁)2.5倍
	S1	筋かい(45×90)シングル
筋かい 接合部	SS6	筋かいプレート(BP-2) 同等認定金物等

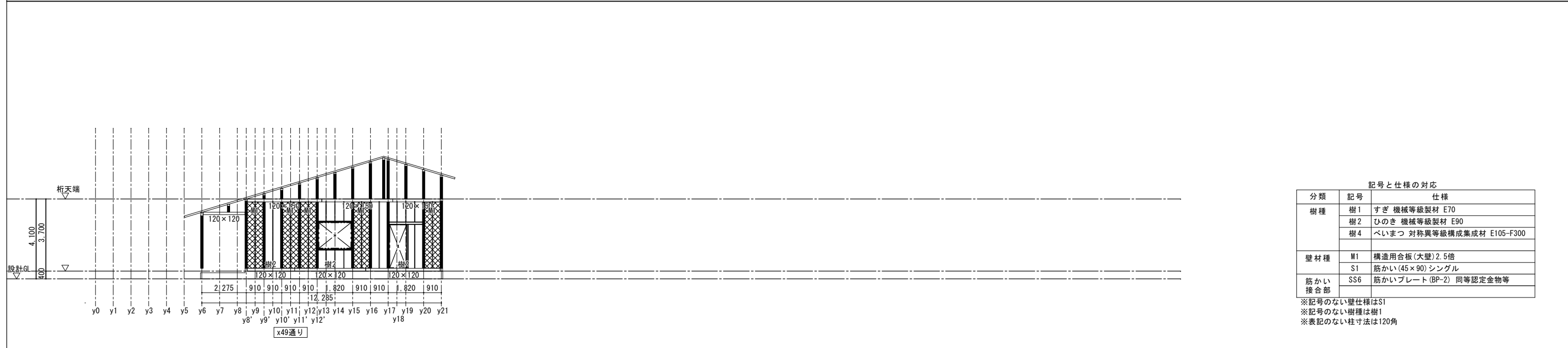
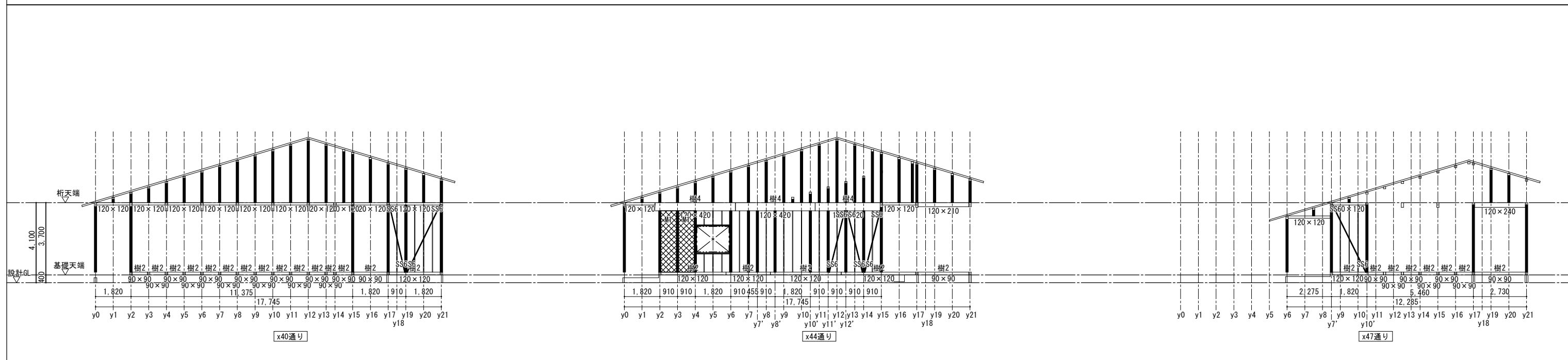
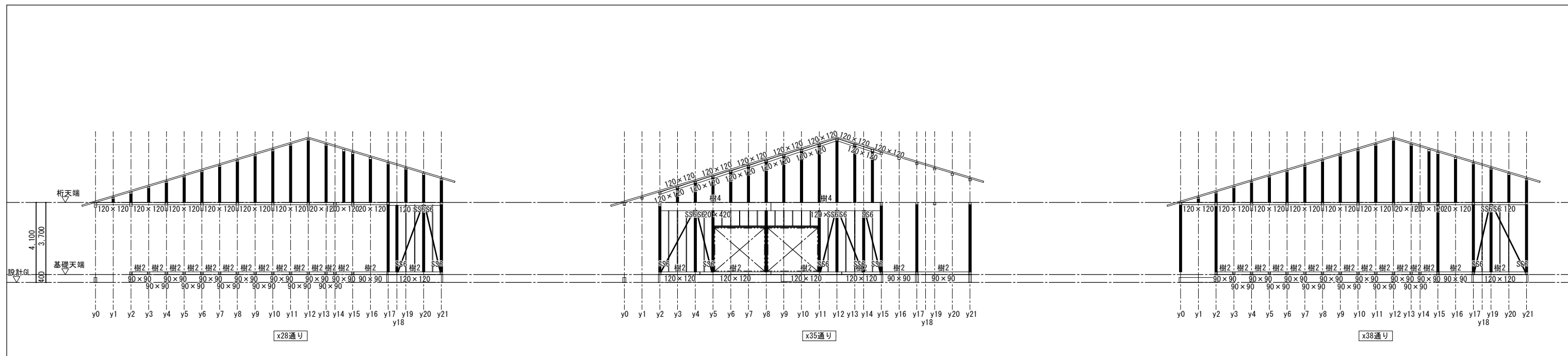
※記号のない壁仕様はS1  
 ※記号のない樹種は樹1  
 ※表記のない柱寸法は120角



記号と仕様の対応

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70
	樹2	ひのき 機械等級製材 E90
	樹4	べいまつ 対称異等級構成集成材 E105-F300
壁材種	M1	構造用合板(大壁) 2.5倍
	S1	筋かい(45×90) シングル
筋かい 接合部	SS6	筋かいプレート(BP-2) 同等認定金物等

※記号のない壁仕様はS1  
 ※記号のない樹種は樹1  
 ※表記のない柱寸法は120角



記号と仕様の対応

分類	記号	仕様
樹種	樹1	すぎ 機械等級製材 E70
	樹2	ひのき 機械等級製材 E90
	樹4	べいまつ 対称異等級構成集成材 E105-F300
壁材種	M1	構造用合板(大壁)2.5倍
	S1	筋かい(45×90)シングル
筋かい接合部	SS6	筋かいプレート(BP-2) 同等認定金物等

※記号のない壁仕様はS1  
 ※記号のない樹種は樹1  
 ※表記のない柱寸法は120角

木 材 リ ス ト

名 称	材 種						等 級										寸 法	備 考		
	檜	杉	米 桐	ラワン	スプルース	米 松	米 ヒバ	無 節	特 選 上 小 節	上 小 節	小 節	特 一 等	一 等	二 等	集 成 材	機 械 等 級 製 材 E90			機 械 等 級 製 材 E70	無 等 級 製 材
土 台	○															○			120×120	防腐土台： コンクリート接触部防腐剤注入
大 引	○															○			90×90	@910
床 束																				鋼製束
管 柱	○															○			120×120	
ポ ー チ 柱	○															○			120×120	
間 柱	○												○						120×30	
筋 か い	○												○						45×90	
梁・桁	○	○													○	○			図 示	特記無き場合 120×120 構造用集成材：E105-F300 対称異等級構成
つ な ぎ 梁	○															○			120×120	
登 り 梁	○															○			120×120	
火 打 金 物																				HB L=990
火 打 土 台	○												○						90×45	
棟 木	○															○			120×120	
母 屋	○															○			105×105	@910
小 屋 束	○															○			105×105	
垂 木	○																○		45×75	@455
雨 押 え	○												○						30×60	
破 風・鼻隠し下地	○												○						24×240	
野 地 板																			厚12	構造用合板
小 屋 筋 か い	○												○						105×27	@1,820
天 井 野 縁	○												○						45×45	
野 縁 受 け	○												○						45×45	
吊 木	○												○						45×45	
窓 台・まぐさ	○												○						120×45	
廻 り 縁																				塩ビ製 保育室：木製
額 縁	○																	○	厚24	木製（木材保護塗料塗）

	名 称	樹 種	等 級	換 立 寸 法	備 考
保育室・調理室 休養室・事務室	カーテンボックス	スプルース			
保育室	木製巾木	桧	特1等	H=100	
	三方枠	杉	1等		
	カウンター	桧集成材		t=30	家具図参照
木製棚	柱	杉		90×90	
	根太	米桐		45×36	@455
	前框・後框	米桐		45×105	
	棚板	ラワン合板		t=12	
室名札	本体	タモ		t=18	クリア塗装仕上げ

防 腐 処 理 設 計 G L + 1 0 0 0 迄 の 範 囲 を 処 理 す る。  
※防腐剤（富士塗料工業 水性オルモロン 同等品）

※特記：使用木材については埼玉県産木材認証制度を活用した材とする事。  
造作材については小川町産材を使用する事。

- 構造用金物
- ・各接合金物については、Zマーク表示金物を使用
  - ・筋かいPL：BPタイプ
  - ・独立柱脚金物：箱型SUS製（SUS装飾柱脚金物ボルトタイプ 参考：（株）タナカ）
  - ・小屋束-上部（母屋、棟）緊結金物 かすがい（フラットかすがいⅡ 参考：（株）タナカ）
  - ・垂木緊結金物 ビス（ST-12同等以上）（タルキックⅡ 参考：シネジック（株））